

令和元年度 第 61 回

西日本地区教員研修会

期日 令和元年 5 月 24 日 (金)

会場 香里ヌヴェール学院小学校



日本私立小学校連合会

〒102 - 0073

東京都千代田区九段北 4 - 2 - 25

私学会館別館 6 階

電話 03 (3261) 2934

新しい時代「令和」最初の西日本地区教員研修会は、「私学ならではの小学校『二十一世紀型教育』の展開」を主題とし、五月二十四日(金)大阪府寝屋川市にあります、香里ヌヴェール学院小学校を会場として、一〇七八名の参加者を迎え開催されました。

香里ヌヴェール学院小

学校は、カトリックの宗教的価値観を基盤とし、

「人を愛し、自らを高める強い意志と豊かな心を持つ子どもを育成する」

ことを目指して、高い学力の保証と宗教教育を核とした「心の教育」の充実に努められています。また、二〇一七年には、「大阪聖母学院小学校」から

西日本地区教員研修会を終えて

西日本私立小学校連合会

会長 山本義和

「香里ヌヴェール学院小学校」に名称を変更されるとともに、二十一世紀の社会に対応するための自己

新しい時代「令和」最初の西日本地区教員研修会は、「私学ならではの小学校『二十一世紀型教育』の展開」を

解決型教育である二十一世紀型教育として、英語によるイマージョン教育と Project Based Learning



arning授業を取り入れた教育をいち早く導入し子どもたちが希望に満ちた未来社会に対応できる教育をスタートしております。

研修会は、モジュールタイム英語で始まり、公開授業に続いての開会式では、西私小連会長としてご挨拶申し上げ、引き続き会場校の西山哲郎校長先生の英語でのご挨拶をいただいた後、私立小学校勤続三十年の永年勤続者の表彰が行われ、井上恵二・尾崎加代子・石川博三・平石光生・黄裕錫・小野浩・森幸彦・須田直子・高木尚子・枘本晃・川野幸彦・佐藤雅史の十二名の先生方が表彰されました。そして、受賞者を代表して、井上恵二先生が謝辞を述べられましたが、その三十年間の思いに一同感動いたしました。

その後、香里ヌヴェール学院小学校の児童による「あなたがたどこさ」「群青」の合唱をきかせていただきました。

次に「香里ヌヴェール学院小学校の教育について」研究部主任の竹内宏輔先生からの研究発表。続いて、「二十一世紀型教育と小学校の英語教育」と題して香里ヌヴェール学院長、石川一郎氏と西山哲郎校長によ

るご講演を聞かせていただき、最後に勇気をもらえる歌 This is me を英語で大合唱し大いに盛り上がり午前の部を終了しました。

午後からは、校長会・十四分科会に分かれての授業研究や提案発表、講演などが活発に行われ、明日からの教育実践に役立つ、実り多い研修会になりました。

最後になりましたが、会場校をお引き受けくださいました西山哲郎校長先生をはじめ、教職員の方々、保護者会の皆様には、様々な準備や当日の運営にお心配りをいただき本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。実り多い研修会ができましたことに、参加者を代表させていただき厚く御礼申し上げます。

国語部会

美しい日本語を育む

国語授業の創造

辰巳 喜之(帝塚山)

国語部では、「美しい日本語を育

む国語授業の創造」という主題のもと、低中高年の公開授業(香里ヌヴェール学院)とその事後研究会に加え、低・高学年の提案発表、新人の先生方のお悩みに答える交流会、全体講演会を行った。

低学年の授業は、二年生の「お手紙」(岡森真弓先生)。挿絵を使って、登場人物の行動や様子など、順序を考えながら読み深める授業だった。登場人物の気持ちの変化を読み取り、子どもたちが自身が学びを感じることができるよう授業を目指すための様々なご意見が事後研究会で出された。

中学年の授業は、四年生の「二つの花」(佐藤裕佳子先生)。場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の気持ちの変化、情景などについて叙述をもとに想像して読むことを目指

した授業だった。事後研究会では、書くことよりも話し合いを中心に授業を進めることでより登場人物の気持ちに迫ることができると話しかけが持たれた。

高学年の授業は、五年生の「新聞を読もう」(下伊豆彰先生)。新聞に



興味をもち、新聞の面や記事の構成を確認しながら読む学習をしていた。事後研究会では、新聞を比べる活動を入れることによって、文章や言葉の根拠を考えさせることによって対話が増えるのではないかとという提案がなされていた。

提案発表低学年部会では、金本竜一先生(関西大学)による『『わかる』を『できる』に変える説明文の授業づくり』と題して、実践例を踏まえて説明文の授業づくりの提案がなされた。「指導事項の明確化」「身につけさせたい力の明確化」「資質・能力を育成する視点での単元構成」の三点を中心に授業づくりに取り組む方法が提案され、説明文の授業をつくる上で大切なことが明確化され、先生方にとっても良い学びになった。

高学年部会では、金井友先生(仁川学院)から「高学年の語彙力指導について」ご提案いただいた。語彙力を向上させることにより、子どもたちの表現が高まり、学習に対する意欲が向上するのではないかと、子どもたちに力をつけさせたいという願いが伝わってくる実践であった。慣用句、四字熟語、ことわざ、難しい熟語などの語彙指導を毎日の国語の授

業で取り入れていくことの必要性を感じる話し合いになった。

全体会では、京都外国語大学教授の森篤志先生をお迎えして、「小学校教師のコミュニケーションスキル―授業における話し方・説明の仕方―」の講演をいただいた。小学校現場に足を運ばれ教師のスキルを集めて分析された結果、教師のスキルについて話すスキルやワザについて授業の様子を見ながらご教授いただいた。小学校教員にとつて明日からすぐに活かすことができるお話をいただいた。

社会部会

子どもがいきる

社会科の授業づくり

神田 孝央(追手門学院)

午前は二本の授業を公開して頂いた。まずは三年生での大川原教諭による、『わたしたちのまちのようす』では、自分たちの住む町と、学校周辺の町の様子の違いと、駅周辺をど

う開発すべきかを考える授業であった。最初は適当に配置していた子どもたちであったが、授業が進むにつれ、「学校までの通学路だからこの土地にはこれが必要じゃない？」など意見交換を通して深めていった。六年生での溝口教諭の『貴族の政治とく

代のある村の人口比率の記録の異常さに注目し、当時の税制に対抗する抜け穴であることを押さえた上で、支配者側としてどのような税制にすべきであるかを考えさせる授業であった。

午後に行われた検討会では、三年生の分科会においては、私学の特徴である様々なエリアから通う子たちに、地域学習をどう進めていくべきから話し合われた。今回は自分の住む地域と、学校周辺の地域の違いを比

べることで興味関心を持たせ、学びを深めていくことがとても効果的であった。反面、根拠の視点をどう捉えるか、目当ての絞り方などについて今後の課題として意見交換がなされた。五年生の分科会においては、教材の面白さと、歴史を自分事と捉



え、身近なものに置き換えて考える視点の良さについて話し合われた。それと併せて、香里ヌヴェール学院では公民分野を先に学習しており、今後のカリキュラムの変更も相俟って、積極的な意見交換がなされた。

検討会の後、追手門学院の神田孝央教諭による『社会科教育におけるICT活用とプログラミング』をテーマとした提案発表と、時代小説家の上田秀人氏による『武士の生活と職分』をテーマとしたご講演を頂いた。

今回の神田教諭による提案発表は、次年度の学習指導要領の改訂に向けて各校が準備を進める中、目玉の一つであるICT機器の活用と、プログラミング的思考を社会科においてどのように進めていくべきかについての考えを、追手門学院での実践を事例として示した内容であった。神田教諭が取り入れた手法はフローチャートである。この良さはコンピュータがなくとも、紙と鉛筆があれば出来ることと、自然と重要項目を押さえた上で、効率よく構造を理解できる点である。事実、教諭の学級ではフローチャートを取り入れる前と後では、児童の歴史事象の説明レベルに差がでていた。多くの

問題提起と解決に向けてのヒントを頂いた。

また上田氏による講演では、江戸時代における旗本や御家人の職分や生活がどのようなものであったのかについて、細やかなお話をして頂いただけでなく、それぞれのジャンルの小説の楽しみ方、作品を生み出すまでの苦勞、原稿の扱い方、出版の仕組みなど、小説家ならではのお話もたくさんして頂いた。

全てにおいて、今後の我々の指標となる大変有意義な研修会となった。

算数部会

これからの時代を生きる

子ども達のための

算数を考える

佐々木 智子(帝塚山)

新元号になり、新しい時代が始まりました。将来の予測が困難と言われる今の子ども達にとって、どのような学びが将来に役立つのか、それぞれの学校で真剣に考え、日々の授

業が行われていることと思います。

西日本算数部の活動の目標は、今年度も引き続き、「これからの時代を生きる子ども達のための算数を考える」です。先生方にとって、有意義な研修会を実施できればと考えております。

さて、今年度の西私小連一日研修会は、香里ヌヴェール学院小学校で行われました。算数部会は、百五十名を超える多くの先生方が参加されました。

午前は低・中・高、それぞれの授業公開が行われました。二年生は、高木尚子先生が「三角形と四角形」の授業を、三年生では、Kennedi Deonarine先生と松岡達也先生が「あまりのあるわり算」の授業を、五年生では、島袋君洋先生が「図



形の角」の授業を行ってくださいました。

二年生の授業では、グループごとにブラックボックスが用意され、どんな形なのか子ども達がわくわくしながら形に触れる活動が取り入れられていました。先に定義を教えるのではなく、子ども達の思う三角形と

四角形の弁別ということを大事にされた授業が展開されました。

三年生は、イマージョン教育が行われており、英語での算数が行われました。包含徐を理解する学習として、エジプトの水不足という社会問題と絡めた課題設定がされていました。

五年生では、五角形の内角の和を考える授業でした。二つの三角形にきれいに分割することができる五角形が提示され、様々な角度から求め方を考えることをねらわれた授業でした。

午後からは、まず、午前に行われた公開授業の協議会が行われました。

授業者がどのような思いで授業を行ったのかを伺った上で、参観者からは、自分自身の学びとなるよう、それぞれの視点からの意見や質問が授業者に投げかけられていました。

その後の全体会では、泉大津市立条南小学校教諭で、学習指導要領等の改善にかかる検討に必要な専門的作業等協力者であられる下道成人先生がご講演くださいました。演題は「算数二〇二〇〇次代を見通した指導へ」。下道先生は、新学習指導

要領のポイントと同時に、特に、D領域（データ活用領域）についてお話をくださいました。新しく設けられた領域ということ、参会者の先生

方も熱心に耳を傾けられていました。この領域の授業を考えるにあたり、どのように考え授業づくりをしていけばよいかなど、先生ご自身の数多くの実践を紹介いただきながら、具体的に学ばせていただくことができました。

ご参会くださった先生方、会場校の先生方、そして運営に携わってくださった運営委員の先生方に、心より感謝申し上げます。

理科部会

おもしろい理科の

授業をつくる

山田 亮(追手門学院)

今年度、西日本私小連の一日研修会は、香里ヌヴェール学院小学校で行われた。

午前は授業公開を中・高学年の二

本行った。

藤井英理子教諭の「電池のはたらき」(四年)では、直列回路と並列回路の違いについて考える授業であった。身近な車(トラクター、普通自動車、スポーツカー)を導入で取り上げ、それぞれの速さのちがいに着目させた。児童自ら、速さの違う車を、回路を工夫し、作ってみたいと探究する姿があった。条件を制限することや定量化などに関する意見も参観者からも出たが、子どもたちがいきいきと活動する様子が見られた。

竹内宏輔教諭の「植物の発芽」(五年)では、発芽に関する疑問を解き明かす方法を自分たちで考え、それを発表し合う授業であった。発表力や表現力については、十分な力が見られるが、理科的内容の深まりがどこまであったかという

意見が参観者からはあった。横断的な学びが言われる昨今、教科を超えた学びについて考える必要があると思われた。

その後、全体会を開き、京都光華女子大学の菅井啓之先生に『ものの見方を育む自然教育の必要性』と題してご講演いただいた。理科とは『健



全な自然観』を子どもたちに構築させるのが使命であり、決して教科書をうまく教えることではないというお話があった。

【講演内容】教科書の枠組みは越えてもいい。二年生に国語辞典を教えたら、校長に注意された。おかしい。三年生で校庭を探索していて、キノコを発見して、まだ習っていないので、見てはいけませんと言っているようなもの。こんな教育をされていて、何が教育なのだろうか。給食を食べていてハエがとんできた。「先生ハエがきました。」と騒がれた。「よく見てごらん」と言ったら、子どもはじっと見る。昆虫は三年生だから見てはいけないと言うのか。枠にばかりはまっしてしまっている。生活科でキノコをたくさん勉強させた。中学校で指導する内容だろうが関係ない。自然から深い学びを教わったらしい。深い学びを考えるうえで、全体の中での個を意識できるかが大切。小さなメガネのネジがある。小さなネジが落ちたら、メガネがかけられない。小さなネジがあることで全体が機能しているということ。個があるから全体があるということ。車も数万からの部品で構成されている。すべての

部品がそれぞれの場所に位置づいたときに能力を発揮する。このような見方をしたときはじめて個が見えてくる。小さなネジの意味をしっかりと考えないといけない。このような見方を育ていくことが理科の指導で大切なことである。また、根源的な部分に立ち返ることが大切でもある。命とはそもそも何なのかを考える。石ころも深い思いや年月をかけたものと捉える。学んだ法則をもって自然界を見直す。他の分野にも活用させる。一つの現象を見た見方でほかのものを見たら、だんだん見えてくる。自分の生活と結びつける。そして、最後は自分の生活に立ち返らせることで、ものの見方が養われる。

先生のご講演の言葉一つ一つに、我々教員自身が、指導の原点に振り返られる思いであった。菅井先生のような長年理科に携わっておられていても、ようやくスタート地点に立てたとお言葉があった。

そして、何よりも、教師が徹底して教える内容を面白く感じるかが重要であるということにもあらためて気づかされた。我々にお話していただく時のお姿はとても楽しそうで、笑顔に溢れ、理科を教えるというこ

とが大好きなことがひしひしと伝わってきた。

生活総合部会

「いのち」を考える授業

池田 大輔(奈良学園)

今年度、生活総合部会では「いのち」をテーマに研修を行いました。

公開授業では、嶽篤史先生に昨年六月に起きた大阪北部地震を受けて、災害が起こった際、児童自身がその都度判断できるようにさせたい。

このような思いから「安全に気をつけて地震から身を守ろう」という授業を行って頂きました。授業では正解のない問いに対して、児童はそれぞれ立場が違うことに気づき、自分にとっての最適解を導いていきました。話し合いの中で友だちの意見を聞き、自分の考えを見直すことを積極的に行っていました。

授業者の嶽先生から、「知識情報を踏まえ対話を通して分析、批判、新しい価値観として想像する力をつ

ける。」ことをどの教科でも意識されながら実践されているというお話を、その後の授業研究の場で教えて頂きました。

その後、神戸海星女子学院の山内泉先生より「生き物の不思議さ面白さを感じる授業」の実践報告を行って頂きました。動物行動学や共生環境エンリッチメントの視点を取り入れた授業を提案して頂きました。

今回紹介して頂いたダンゴムシを扱った授業では、代替性転向反応という習性や紐にぶら下がる時の様子など子どもたちがもつと見たい、もつと知りたい、といった自発的に触れ合おうとするようなエッセンスがたくさん含まれていました。

子どもたちは図鑑などを用いて住みやすい家を用意してあげ、その上でダンゴムシを飼育することによって、その段階でダンゴムシに愛着を持ち、その後、迷路を用いてダンゴムシの習性を紹介すると子どもたちはグッと興味を持ち観察するようになるそうです。

そして飼育していたダンゴムシが死んでしまった後のクラス会議では、「今後、ダンゴムシの飼育を続けるか」との教師からの問いに対して「生きて



いるダンゴムシを大切に飼いたい。」「自然に戻してあげたい。」という二つの考えが出てき、その中で子どもたちは自然に戻すという選択をしたそうです。この様に生き物が死ぬという経験を通して子どもたちの心は大きく動きます。

今回の実践報告を受け、授業でダ

ンゴムシを扱うメリットとして、①飼育の基本が学べる。②自分で探して、自分で飼育することで愛着がわく。③子どもでも扱いやすい生き物である。④生死について考えることができる。⑤迷路を通してダンゴムシの面白さ、不思議さがわかる、といったことがあげられます。この様

な点からも生き物に関心を持たせるのにダンゴムシが適しているということを学ばせて頂きました。

今後、虫や魚などの生き物だけでなく、哺乳類の温かさを伝えたいという想いも生活総合部会の中で意見として出てき、そのためにはアレルギーの問題などクリアしないといけないこともあるが、子どもたちにぜひ「いのち」を伝える教材として、今後哺乳類を扱った授業案なども考えていきたいです。

今回のお二人の先生方の発表を聞き、「いのち」について深く考える素晴らしい研修になりました。

音楽部会

子どもたちの生き生きとした

表現を目指して

山崎 菜央(京都女子大学附属)

今年度の音楽部会も、子どもたちが意欲的に音楽活動に取り組み、感じたことを生き生きと表現できる授業を目指して研究を進めていきます。

今年、香里ヌヴェール学院小学校のSabrina Zirkazadeh先生と梶田真紀先生が「Rhythm and Enjoyment (リズムとなかよし)」という題材で一年生の授業をしてくださいました。このクラスの一年生は、スーパージングリッシュコースの子どもたちで、音楽の授業は全て英語で行われていました。授業の最初は、梶田先生の伴奏に合わせて子どもたちが元気

いっぱい「Greeting Song」を歌いました。

その後行われた「Calling Name」では、子どもたちが、身体全体でリズムを感じながら、拍の流れのつて活動している様子が見られました。

授業のメインは「Shopping Game」でした。子どもたちが四つのグループに分かれ、自分たちで作成した食べ物などのカードを使って、順番に一对一のやりとりをしていくというものでした。このやりとりも、先程の「Calling Name」のように、身体全体でリズムを感じ、相手の友だちに一生懸命に伝えようとする姿が見られました。

最後には「Hey Lets Go! (さんぽ)」を元氣よく英語で歌い、授業を終えました。

授業全体を振り返ると、入学して間もない子どもたちが、友だちと一緒に活動することで、互いに音楽の感じ方や表現を共感し、高めあおうとする姿が印象的でした。

午後からは、合唱指導者であり、神戸市立小学校スーパードバイザーである小比賀眞澄先生(元神戸市立桂木小学校教諭)をお招きし、



「中・高学年の歌唱指導」というテーマで講演・実技指導をしていただきました。

まず初めに桂木小学校の四年生や六年生の音楽会の映像を見せていただき、子どもたちにこのような力をつけるために、日頃どのような指導をしているのか、低学年から順に教

えていただきました。

合唱指導のポイントとして、斉唱の曲を歌う低学年では、交互唱・分担唱や振り付けを入れること。二部合唱を始める中学年は、全員がソプラノパートとアルトパートを歌えるようにすること。高学年では、発声練習も兼ねて、まず全員でソプラノパートを歌うこと。そして、パートを決めるときはアンケートをとるなど、斉唱から合唱へと力をつけていくノウハウを知ることができました。

また、教育芸術社の教科書の教材を中心に、参加者が子ども役になつて実体験をすることで、授業ですぐに実践できる指導法の引き出しを増やすことができました。あわせて、器楽や鑑賞の教材でも、子どもたちの歌の力を伸ばす要素が多くあることを知りました。例えば、二人組になり、歌の部分とリコーダーの部分それぞれが階名唱することで二部合唱となり、音感を育てることができ、繰り返し練習をすることで自然と二部合唱ができるようになることを学びました。

今回の研修会を通して、他校の取り組みを知ったり、すぐに自校で実践したい指導法を学んだりすることができました。この学びを今後に活かしていきたいと思います。

図工部会

「造形的な見方・考え方」を引き出す図工を目指して

前田 真偉子（城星学園）

香里ヌヴェール学院の倉本祐子先生、福田沙和香先生による二年生音楽を感じて：」の公開授業が行われました。

「ボレロ」の曲を聴いて感じたことを、クレパスや絵の具、筆を使った方法だけでなくスパッタリングやドロッピングなどの技法の中から方法を選択して画用紙に表現するという

内容でした。曲を聴いた子どもたちは、砂漠みたい、こわい感じがする、歩いている、冒険しているなど様々なイメージを持ったようです。道具を机上に用意するタイミングなどにも気を配られた細やかな指導のなか、再び曲が流れ、子どもたちは感じたことを思い思いの色や筆づかいで表現していました。授業研究会では、同校での図画工作科の取り組みが紹介され、「みつけノート」という週一回程度宿題として出される四十一年以上も続くスケッチの活動に伝統を感じました。

今回の授業の内容は、高学年で取り組まれている学校もあり、二年生では難しいのではないかと思われていましたが、子どもたちへの投げかけ方や選曲によって、低学年でも取り組める内容であると感じたという声がありました。同じメロディーが繰り返されるところが、二年生の子どもたちにもイメージを捉えやすかったのではないのでしょうか。曲が進むにつれ音が大きくなったり盛り上がりつつあったりする様子を上から描き足していく様子があり、それが過程として見えなくなってしまうところが惜しいという意見も出ました。

巻物のように長い紙を使ってみてはどうか、薄く透ける紙を数枚使って曲調が変わったと感じるときに上に重ねて描いてみてはどうかなど子どもたちの豊かな表現をさらに活かしていくことはできないだろうかと議論されました。子どもたちの感じ取り方の素直さ、自分が受け取ったイメージや考えを大切に行っている様子



が伝わる授業でした。

授業研究会の後は、文部科学省教科調査官の岡田京子先生に、「新学習指導要領を踏まえたこれからの図画工作科の指導」というテーマでご講演いただきました。午前の公開授業にも参観していただき、授業での子どもたちの様子にも触れながらお話ししてくださいました。造形遊びの実

践例や子どもに提示するときの言葉の選び方、評価についての考え方など、今後の授業ですぐに活かしていける具体的なお話をたくさん伺えました。造形遊びのワークショップでは、木切れや割り箸を使って並べたり積んだりする活動をし、どこに並べるか・どのよう

に並べるかを考え、それぞれが思い思いの場所で活動を楽しみました。造形遊びの活動は、試しながら形を作り変えていくことができるので、発想力・構

学校保健部会

心をはぐくむ

コミュニケーション

中村 真美（ノートルダム学院）

今回の学校保健部会では、ビューティーアップコミュニケーション代表の浅田雅美先生に「心をはぐくむコミュニケーション」をテーマにご講演を行っていただきました。参加者がモデルとなつてのデモンストレーションもあり、外見による効果を実感する研修となりました。

まず、しっかりメイクをしている場合とノーメイクの場合の女性がディスプレイに映し出され、自分が何かを相談するならどちらの人に相談しますか？という質問から講演が始まりました。しっかりメイクをしている方は、対応をきちんとしてくれそう、ノーメイクでは適当にあし

らわれそうな気がするという意見があり、同じ女性でもメイクを変えるだけで相手に与える印象が大きく変わってしまう可能性があるということでした。

具体的には、眉の形が鋭角であったりアイシャドウに寒色を使っていたりするとクールに見え、人によってはきつい印象を与えることがあり、逆に眉の形がなだらかでアイシャドウに暖色を使うと柔らかさや温かい印象を与えることができるそうです。

養護教諭は、児童やその保護者と関わるため、明るさ、温かさや安心感を与えることが必要とされます。身だしなみを整えないと清潔感がなくなり「だらしない」と受け取られ不信感につながる可能性があります。

デモンストレーションでは、ベイスメイクをはじめ眉、アイメイク、マスカラ、チーク、リップなどの色の使い方、形の描き方を一つ一つ丁寧に説明していただきました。

質疑応答では、昼食後などの化粧直しのこと、子どもの化粧について、保護者から信頼されるようなメイク、朝のメイク時間の短縮についてなどの質問がありました。先生が実



実践されているのは、簡単な化粧直しとして、小さいサイズのお粉と口紅の入りったリップクリームをポケットに入れておき、ファンデーションがとれた口元などに粉をはたく、リップをササッと塗るということだそうです。

響は決して小さくはなく、第一印象がよければ、コミュニケーションの始まりもスムーズになります。「メイクで与える印象が変わってしまうなら、自分の内面をあらわしてみたらどうですか?その外見は、自分の思いをあらわしていますか?」という言葉が印象的でした。

子どもがメイクをする時に気をつけてほしいのが、肌トラブルということでした。化粧品を選ぶ時は、洗顔料でとれる肌が荒れにくいものを勧めてほしいということでした。

女性には、メイクによって与える印象を大きく変えられます。相手にどう受け止めて欲しいか、それを意識してメイクすることはコミュニケーションの一環になります。外観がひとに与える影

体育部会

二十一世紀を生きる

子どものための体育

磯部 晋吾(帝塚山学院)

香里ヌヴェール学院小学校にて「私学ならではの小学校二十一世紀型教育」を主題とし、西日本私立小学校教員研修会が実施されました。

公開授業は、西村淳先生における六年生の「バスケットボール」の授業でした。全九時間の指導計画の八時間目が公開され、チームの特徴に応じた作戦を考えたゲームを行っていました。ゲームとゲームの間にタブレットで撮影した、自分達のチームの動きを確認し作戦を立て直し、後半のゲームに活かした授業展開が行われていました。

昼からは、午前中に行われた「バスケットボール」の授業について、授業研究が開かれました。

授業者より香里ヌヴェール学院では「分析・批判し、対話を通して創造的思考による最適解を伝え合う授

業の工夫」を研究テーマとしている事が述べられました。

そのテーマを意識し体を動かすだけでなく、タブレットで自分の動きを分析しながら対話を通して進めた授業展開の話がありました。

ただ、児童達が対話してきた事が全て動きに繋がる事ではないので、成功体験になるとは限らない事も述べられました。

指導者からのアドバイスや指示だけでなく、児童達からの気づきを大切にしていく授業づくりを目指していた事も伝えられました。

次に研究発表として、奈良学園の岡井幸紀先生より「子ども達で広げる運動の楽しみ方」と題して、跳び箱運動における異学年交流授業の実践発表がありました。

異学年交流授業を行う目的は次の三つでした。

一つ目は、高学年が低学年を教える事で、既習運動の動きのポイントなどを見直し、自己の能力の向上につながる事を確かめたいと思った事。

二つ目は、教師だけでは授業内に全児童を指導する事は難しいため、子ども同士で教えあう事ができ

ば、技能指導が効果的に行えると考えた事。

三つ目は、運動に対して苦手意識や劣等感を感じている上級生が、下級生に指導する立場を通じて、運動に親しめるようにしたいと考えた事。

実際に授業を終え、五年生が三年生を指導する事で、教える楽しさや難しさを実感できたデータも示され



ました。その中で、開脚跳びができない五年生が、三年生を跳ばす事ができた事で自信が上った話なども伝えられました。

最後に a t m a n 株式会社フィットネス整体カラダラボ代表の小菅美由起先生をお招きし、「自分で体と心を『つくる』整体」の実技研修が行われました。体育座りから手を使わず立つ体験から始まり、自分の体の動きやバランスの取り方は、全て「仙骨」である事が伝えられました。

その後、正しい「気を付け」の姿勢や二人組でバランスの取れた「おんぶ」、正しい「歩き方」の確認などが行われました。

「仙骨」の角度や動かし方がわかる事で体が整い、体が整うと心も安定する流れができるとの事でした。

自分の体と対話する事ができた実技研修でした。

家庭科部会

家庭科における主体的・対話的で深い学びをつくる食の授業

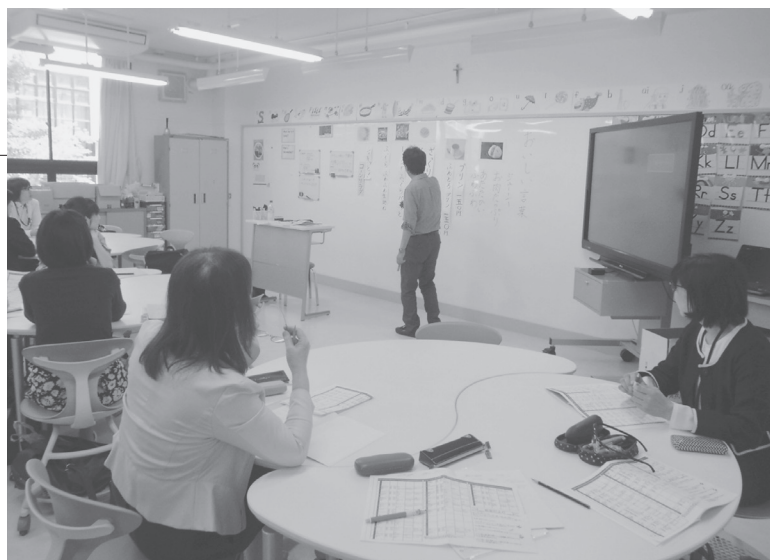
高見 英子(四天王寺)

昨年度に続き、今年度も武庫川女子大学で『生き生きとした食の授業』を指導・実践されている藤本勇一先生をお招きして、模擬授業と食育講演をしていただきました。

家庭科では、学んだことを生活に広げていくために、『自分ごと』としてとらえることを大切にしています。特に子ども達にとって、食することは生活に密着しているため興味関心が高く、自分の生活経験を振り返って考えることができま

「食べる」という視点から、子ども達が主体的に取り組むことができるヒントを考えました。

模擬授業では、「○○の肉まん」と題して○の中に入る言葉を考えました。「お肉たっぷり」「あたたい」「ふわふわ」「ジュシー」。肉まんの様子を表す言葉が次々と途切れることなく浮かんできました。



また、子ども達にコンビニでプリンを購入する時に『プリン』と書かれたものか、『ふわとろプリン』と書かれたものかどちらを選ぶのか聞いたところ、圧倒的に後者のプリンを選んだ子どもが多かったです。同じプリンなのに『ふわとろプリン』の方がおいしそうに感じるし、楽しくなるという理由からです。

食欲や購買意欲を刺激する言葉をしズル感と言います。擬音語や擬態語、固有名詞を使い、季節感や思い出に働きかける『おいしい言葉』を考え使うことで、食欲がわき楽しくなります。

『おいしい言葉』がよく使われているのは、主にコンビニや居酒屋で多いそうです。いかにしてしズル感を出して購買意欲を引き出すかが、売り上げに繋がるのでしょうか。

ある学校の五月分の給食献立表のメニューに、おいしい言葉をつけてみました。『シャキッとサラダ』『昔懐かしだしまき卵』『ころころ豆ごはん』『ふわふわミニオムレツ』『がつつりハヤシライス』『パリッとさばの塩焼き』などしズル感のあるメニューが出てきました。おいしい言葉を考えてだけでイメージがわき出し、楽し

んで取り組むことができました。

主体的・対話的に深い学びを得るには食育はびつたりです。栄養や健康だけでなく、歴史や地域、食文化、言語、流通、経済といった幅広い内容に子どもの学びが届く教材だからです。

子ども達から問いを引き出し、『自分ごと』にして気づかせるためには、タイトルやイラストを含めた見せ方の工夫も必要です。

外国語部会

これからの私立の外国語活動

丹澤 光世(箕面自由学園)

一、事後研究会

(1)香里ヌヴェール学院小学校の授業形態やカリキュラムについて

千原若菜教諭から紹介があり、SSC(スーパースタディーズコース)、SEC(スーパーイングリッシュコース)の特色について説明があった。千原教諭からSSCコースについてと三年生授業事後研究の報告、Seanna Nichols教諭SECコース

について二年生授業事後研究の報告、質疑応答時間を持った。

(2)SSCコースについてとSSCコース三年生 授業事後研究

SSCコースの英語の授業ではContent based material'Basic Skills'Different Culturesの三つを特色としている。本時でも教科書の活用、フォニックス指導、外国人教員の文化に触れることを授業で実践した。

フォニックス指導にも力を入れ、ジョリーフォニックスを取り入れている。アルファベットの文字名を学習する方法でなく、文字の音を物語やジェスチャーで学び、音を習得し、読み、書きの指導をしている。

また外国人の教員の出身や文化背景を知ることができる話を授業に取り入れ、世界の様々な異文化を理解し、様々な文化背景の人々を尊敬し、世界を知ることができるようにしている。

本時の単元として、Let's Go of Yesterday and Todayを用いた。単元目標として、現在および過去の天気や場所について説明することができる。個々のGWについてどこにいたかを紹介し、事実を伝えるだけ

でなく、児童が友達の答えを考えるようクイズ形式でどこにいたか、クイズ形式で発表し学習することとした。

また本日の授業で、字を書く活動のために、ラミネートしたwriting boardを使用している。これを使用することで、児童が大文字小文字の高さに気を付けることができる。罫線は色分けされており、指導の際に、色で文字指導をし、書く場所を伝えることができる。一番上の線は、青で、空のように高いといった具合である。こちらのSSCコースでは、こういった重要な指導ポイントは、日本語で伝達している。さて、フォニックス指導に使用しているジョリーフォニックスは、四十二音あり、ジョリーフォニックスの指導の順序で、授業に取り入れている。ストーリーを学びながら、お話の絵、文字の形と音を学んでいく。リーディングや音を取り入れた歌を学習しながら、メロディーとともに児童はフォニックスを習得している。本校の二コースに導入している。

また英語で日記を書くことを週一回の課題としているが、今までは何を英文で書けばいいかと困っていた

児童も多くいたが、名詞と形容詞、動詞を一つずつ使って、文章を書くようにと明確に伝え、文章を書く児童が増えてきた。今回の単元目標が達成できたかという点では、何度も指導案を練り、変更してきた。最初は、ペアで文章をホワイトボードに書くようにという交流活動を計画していたが、タブレットやシートのアプリを用いることによって児童の品詞の理解、定着を見ることができた。また音声の録音の学習効果があった。そして児童がリテリングし、内容理解を深めることもできた。そして、次に京都外国語大学外国語学部英米語科教授杉本先生に講演をしていただいた。

二、講演「今求められる英語授業」

「communication能力の基盤を」
京都外国語大学 外国語学部英米語科教授

杉本 義美先生

(1) 今求められる外国語教育とは
① コミュニケーションに必要なもの
A small talkは本当に必要か。どの
ようなsmall talkが必要か。
I pattern practiceで習熟を図るの
ではなく、工夫をすることで、もつ
と子どもとの話題の共有化が図れ

ないか。単なるpattern practice
で終わらないようにできないか。

ウ task活動 taskの内容がrelevant
でauthenticな内容であるか。ま
た、interactionについては
native teacher, Japanese
teacher, studentsの三者が関わ
るinteractionになっているか。

② 授業づくりの基本

③ 英語のinputの重要性

(2) 英語で児童とinteractionをする
ために

CANDOリスト

アクティブラーニングの実現につ
いてご指導をいただき、そして全体
のまとめとして次のようなお言葉を頂
戴した。

外国語授業で行うことのまとめと
して、導入では、言葉を話す必然性
や場面を感じたり、自分との関係性
を感じられる工夫をする。理解段階
での発問の工夫として、教員は答え
を言わず、ヒントを与えて子ども同
士が答えや違いを見つけることがで
きるようにしたり、気づきを与えら
れるようにする。練習段階では
自己関与度の高い練習を与える。ま
た、思考を共有できる新しい発見が
できる活動を行う。繰り返しの練習

を忘れた頃に行う。体験や経験は残
るが繰り返しの帯学習をして、深い
学びができるような言語活動の工夫
ややりとりを繰り返して行わないと、
強いインパクトがないので
学習したことが残らない。

そのために
は、どの時期
までにどこま
で教えるかと
いうCANDO
リストを利用
する必要がある。
小学校での
外国語活動
は必要であ
る。アクティ
ブラーニング
は生徒中心の
学習であり、
長いスパンで
実践をしてい
く必要がある
というまとめ
のお言葉も頂
戴した。

最後に、レ



シテーションコンテストに向けた話し合い、昨年度の課題を受けた話し合いと、今年度の役割分担を行った。

学級経営部会

つなげる つながる 学級経営

弓削 裕之(京都女子大学附属)

漫画やアニメ、映画が火付け役となり、全国的にブームとなっている

百人一首。実は、学校現場では、二十年も前から子どもたちの心如火をつけていた。そう、「五色百人一首大会」である。五色百人一首大会は、全国の小学校教師が、「地元で五色百人一首の大会を開こう」という目的で、一九九九年に全国十二か所で行われた大会だ。今では都道府県大会や地区大会、地方大会など広く行われており、毎年、未就学児から中学生までたくさんの子どもたちが熱い戦いを繰り広げている。大会は、全て教師や支援者のボランティアで運営、開催されており、団体戦・個人戦など地域によって特色ある試合が行われている(「五色百人一首大会」ホームページ参照)。

今回、学級経営部会では、大会を通してご縁をいただいたTOS S五

色百人一首協会の大松幹夫先生、堀川文範先生に来ていただき、『学級づくり』に役立つ「五色百人一首」の子ども活躍できる指導の工夫」というテーマでご講演いただいた。大会では中心となつて活躍されているお二人であり、もちろん、現役の小学校教師として日々子どもたちをご指導されている先生方である。

講演の初めは、百人一首の歴史から、五色百人一首ができるまでの歩みについてお話をしていた。その後、参加者の先生方同士でペアをつくり、五色百人一首の試合に挑戦する場が設けられた。子どもの立場になつて取り組むことで、教師目線では気づかないような手立てをたくさん見つけることができた。いきなり全てのルールを教え込むのではなく、試合に取り組みながら少しずつルールがわかるような指導の工夫をされていたのである。これは目から鱗であった。指導校長である富村誠先生(京都女子大学附属小学校校長)の指導助言にもあったが、最初の試合は黙ったまま行われていた試合が、後半になると徐々に先生方の間に声が生まれ、二回目の試合では「はい」と礼をとる声や、楽しそうな笑い

声、対戦相手との会話が止めどなく続くようになっていた。初めて出会った人とでもすぐに仲良くなれる五色百人一首の魅力を感じる体験だった。

後半は、各都道府県で開催されている五色百人一首大会の概要と、実際に先生方が出会われた子どもたちのお話だった。学級で課題を抱えている子どもたちが、五色百人一首との出会いを通して、学級の仲間と積極的につながろうとする様子を見せていただいた。

五色百人一首が、学級でこそ生きる教材であることを再認識させられた。子どもたちを学級で輝かせるための先生方の細やかな配慮も知り、大変に心を打たれた。また、大会優勝に向けて励む親子の絆のエピソードもあり、五色百人一首のそばでは、数え切れないたくさんのドラマが生まれているのだらうと感じた。



今年、初の試みである第一回五色百人一首交流全国大会が行われ、ますます広がりを見せている五色百人一首。百人一首は、未来に受け継ぐべき日本の伝統文化だ。この研修を機に、五色百人一首が多くの学級に広まり、未来を担う子どもたちの成長を支えてくれることを念じている。

メディア教育部会

ICT活用の今後のために
私学としての展開を考える

大谷 英之(関西創価)

○授業研究会

情報「一年生ともっと仲良くなろう」(六年)

田中秀臣(香里ヌヴェール学院)
香里ヌヴェール学院としては教育の三本柱のひとつとしてメディア教育を入れている。

Spheroは三時間程度、CIPSは二時間程度実施。今回は六年生の児童にあえて失敗体験をさせたかった。

できる限り教師が声をかけず、自分の力で解決させることを狙いとした。

○提案発表

「ひろげよう情報モラル・セキュリティコンクール」

提案者

森岡俊勝(雲雀丘学園)
松本尚樹(雲雀丘学園)

同コンクールにて、雲雀丘学園が

指導事例部門において文部科学大臣賞を受賞した。汎用性の高さが評価されたため、他校でも活用できるところがあると考え、今回の発表に至った。

雲雀丘学園におけるメディア教育の実践例紹介を学年別に紹介。様々なコンテンツや同コンクールへの取り組みを通し、メディアリテラシー・情報モラル教育を展開している。



○講演1

「プログラミング教育の事例紹介」
講師 仲矢史雄先生(大阪教育大学
科学教育センター教授)

プレゼン、集計アプリケーション
Mentimeterを活用。意見をグラフとして可視化ができる。データを集めてどうするかを考えることが可能。
(プログラミング教育必修化(新指導要領)のポイント)①社会が高度にIT化される中で、だ

れでもプログラミング体験を持てるようにする。
(2)【プログラミング】的思考を養うこと。(3)実
施教科・単元・学年は学
校の裁量次第。

【アンプラグド型教材
の特徴】

・ソフトウェア型、ロボッ
ト型は教材自体が「プロ
グラミング思考」を方向
づけしてくれる

・一方でアンプラグド型
教材は、指導者が「プロ
グラミング的思考」を、
十分に理解していないと
単に楽しい活動で終わる
ことがある。

・条件分岐や繰り返し、シンボル化、
バグとりといったプログラミング的
なことを理解している必要がある。
等

○講演2

「プログラミング教育について」
講師 垣本徹先生(大阪教育大学
教育学部准教授)

少子高齢化社会は今後も進み、若
者一人で一人の高齢者を支えなけれ
ばならないようになってきている。

情報教育、教科指導におけるイン
ターネットの活用、校務の情報化が
今後さらに必要になっていく。

小学校に必要なのはプログラ
ミングを体験し、コンピューターに
意図した処理を行わせるために必要
な論理的思考能力を身に付けるため
の学習指導。

○ワークショップ

「マイクロビット×電気の利用」

講師 アンドリュー・ガン氏(ケニ
ス株式会社企画部商品開発グルー
プ)

ケニスの取り組みを通し、小学校
におけるプログラミング教材を紹介。

海外におけるプログラミング教育
の報告。

学校図書館部会

「主体的・対話的で深い学び」を支える学校図書館の創造

田代 弘子(甲南)

今年度、西日本私立小学校連合会の学校図書館部会では『主体的・対話的で深い学び』を支える学校図書館の創造というテーマのもと研究を進めている。

五月二十四日金曜日に、西日本私立小学校教員研修会が香里ヌヴェール学院小学校で開催された。午前中は下伊豆彩教諭による公開授業「新聞を読もう」(五年)が国語科と合同で行われた。

まず、全児童に小学生新聞が配布され、それを読んで気付いたことを発表した。「どこから読み始めたか」の問いに対し、「大きな字」や「写真」といった意見が上がっていた。それを受けて、新聞の特徴である「逆三角形の構成」について先生が解説された。

次に、令和元年五月一日の朝日小

学生新聞と毎日小学生新聞の複写が児童に配布された。そのプリントは見出しや写真が一部切り取られており別々に封筒に入った「新聞パズル」も同時に配られた。児童はそれらを比較して内容分析し、最もふさわしいと考えた見出し、小見出し、写真を選んで記事を完成させた。パズルにより興味を持たせて読む意欲を引き出すという手法に感心させられた。

授業研究会では、新聞を読む時間を十分に確保して、読み込むことで、さらに根拠を持つ適切なパーツを選び紙面を完成することができるとはなかったといった意見もあった。また、国語科と学校図書館の連携についても言及された。国語の教科書にも二紙を比較する例が掲載されているが、最新の情報を適宜提供することで児童の意欲や関心を引き出すことができる。今回の合同研修をきっかけにさらに国語科との連携が進むことを願っている。

後半は、図書館情報学に詳しい関西大学文学部の渡邊智山教授による講演であった。

まずは、「図書館情報学の学問的背景」について解説された。「情報」の

定義は各分野により様々で定まっていなと述べられ、図書館で使われる「情報」の意味について考えさせられた。

続いて、「図書館の歴史」「外国の図書館」「公共図書館の新たな取り組み」といった、図書館の歴史的な変遷を辿りながら現在の状況について語られた。日本では図書館といえば本を読む場所というイメージが強いが、外国では他の公共施設とも連携した総合的な学びの場となっているとのことだった。

先進的な取り組みでは、地域住民のコミュニケーションの場として公共図書館を位置付け、学力向上の一端を担う場としている図書館もあるといった事例をご紹介頂いた。

さらに、「情報」の視点から「情報リテラシー」「情報活用」「情報検索の難しさ」について考察し、最後に「教科と学校図書館」「公共図書館と学校図書館の連携」といった学校図書館の在り方についての考えを述べられ

た。このように専門的・多角的な視点から貴重な情報を得ることができ、学校図書館について深く考えることができた。

特に講演の中で、「図書館を『知る』ことは自身の生活環境を豊かにする『手段』を知ること」との言葉が印象的であった。学校図書館においても、訪れる児童の生活が豊かになるような場を提供していきたい。



学校紹介

「香里の丘から未来が見える」

香里ヌヴェール学院小学校

校長 西山 哲郎

大阪聖母から香里ヌヴェール学院小学校へと校名を変更し、今年度で三年目を迎えます。本校は小中高と連携し、Project Based Learning、先進的な英語プログラム、ICTを二本柱に掲げ、二十一世紀型教育そして十二年一貫教育を推進しています。

さて、なぜ従来の教育から二十一世紀型教育へとシフトすることが求められているのでしょうか。

その大きな理由の一つとして、日本には今、大きなパラダイムシフトが訪れていることが挙げられます。

パラダイムシフトが起こると、それまでのやり方がまるで通じなくなり、当たり前だと考えられていた前提条件が大きく変わってしまうので、対応の仕方も変わらざるを得ません。

日本で現在起きているパラダイムシフトの原因は、人口減少と高齢化に他なりません。人類史上いまだかつてない急激なスピードと規模で人口減少と高齢化が進行し、その結果、人口が右肩上がりが増加する際に適用したパラダイムが通用しなくなっています。

しかし、そんな先行き不透明な未来を生きる子どもたちには、これまでの常識や固定観念に囚われない解決策を見つけ出す思考、国内国外を問わずフットワーク軽く駆け巡るバイタリテイ、他者と広く深く関わることのできる強くたくましくそしてしなやかな精神性、さらには正しい選択と積極的なチャレンジを惜しまないオープンマインドを身に付けてもらいたい。

そこで、本校では、日々の学校生活の中で、二十一世紀型スキルと呼ばれる自分で考える力を養い、生まれるながらにして想像力と創造力を備

えた子どもたちを支えていく探求学習や学校行事を行なっています。PBLでは、子どもたちがワクワクしながら一つのプロジェクトを通して学び合います。「楽しそう!」「面白そう!」と興奮しながら学ぶ喜びを見出し、「楽しかった!」「気付いた!」とポジティブな体験から主体的に知識や知恵を獲得します。

加えて、英語教育においては、イマージョンプログラムや週四時間の充実した授業を通して、世界で活躍するための物怖じしないマインドと高い語学力を身に付けます。将来的には「アジアNo.1の英語力」を標榜するプログラムへと発展させていく計画です。理想は、国内や海外の大学に適當するためのプレスクールのような十二年一貫校。

しかし、革新的な取り組みを進める中で、決して忘れてならないのが、本学の建学の精神であるカトリックの教えです。一九二三年に創立者であるメー・マリー・クロチルド・リュチニエが心から願った、「聖母の子ども一人ひとりが家族のため友のためまた社会において真理の中に人々の心をつなぐ平和の天使でありますように。」という思いを二十一世紀

の今も引き継ぎ、伝統を継承していることが本校の最大のリソースです。カトリック教育を通して心の拠り所をきちんと持ち、自己と他者との繋がりを感じ、自信を持って前に進んでいく子どもたちの未来は明るいと思っています。

カトリック教育という伝統と未来を見据えた二十一世紀型教育という革新が本校の教育の両輪を成しています。一人ひとりの児童が、自己肯定感が高く、所属する共同体でいきいきと役割を果たし、幸福な人生を送る人間へと成長することが香里ヌヴェール学院小学校教職員全員の願いです。



令和元年度 第56回

東京地区教員研修会

期日 令和元年6月7日(金)

会場 白百合学園小学校

東京地区教員研修会を終えて

東京私立初等学校協会

理事 横山 豊治

子校長から白百合学園小学校の沿革や教育の特徴などの話があり、最後は、二十三名の永年勤続者の表

六月七日(金)白百合学園小学校を会場として、第五十六回東京地区教員研修会が開催された。都内五十五校からの参加申し込み者は、一、四九四名を数える大規模な研修会となった。

彰が行われた。

全体会終了後は、白百合学園小学校の先生方を中心とした各教科の研究授業が行われ、授業後の検討会で

全体会で初めに、先日の私立小学校在学中児童の悲しい事件に対し、出席者全員で黙とうがささげられた。続いて、東初協ならびに日私小連の小泉清裕会長から挨拶があり、「私学は決して画一的な教育をするところではない。今こそ、私学がそれぞれの独自性を発揮し、私学ならではの教育を行ってほしい。」という話があった。

続いて、東京都生活文化局私学部長の濱田良廣氏の祝辞を賜り、次に会場の根本徳



国語部会

魅力ある国語教師をめざして

家城 直子(国立音楽大学附属)

国語部午前の部会は、二年生、三年生、六年生の三クラスの公開授業が行われた。

二年「きつねのおきやくさま」(授業者・清水恵子先生)

本文中の「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ。」は、だれのことばかを考える授業であった。子どもたちは、紅白帽をかぶり、自分の立場を表明しながら授業に臨んでいた。拮抗対立の中で、叙述に沿って述べられた意見に共感し、立場を変える児童もあり、他者の意見を聴き合い、学び合う姿が印象的であった。また、子どもたちの話し合いの中から授業を

は活発な意見が出ていた。

午後は、部会ごとに講演会やフィールドワークなどが行われ、十五の各部会が一日大変熱心に研修を進めていた。

進めようとしてされている先生の姿に、日頃から先生が大切にされていることを垣間見ることができた。協議会では、文章を読み解く際の原理・原則を教えることの大切さを再確認し、基礎・基本をおさえた上での読解の重要性を共有することができた。

三年「わたしの『すき!』を語り合おう」(授業者・大塚瞳先生)

読みのずれを取り上げ、拮抗対立



の場面を組織し、学びあう場面を多く設定した授業であった。教科書教材「あらしの夜に」に加えて、登場人物の気持ちの揺れ動きが描かれる続編「はるはれたひに」も扱った。狼の言動をもとに、やぎを食べたいという欲求、一方でそれを躊躇する姿、そして大切な友達としてまた会いたいという狼の思いを考えた。互いに、これまでに自分になかった視点で物語を味わう面白さに気づくことで、他者と関わることの愉しさを感じとっていた。

六年「伝えよう! 尾瀬の魅力・尾瀬のマナー」(授業者・遊佐恵先生)

高原学校で訪れる尾瀬の魅力をプレゼンテーションするため、聞き手の心をつかむキャッチコピーを考える授業であった。

よりよい言葉を厳選しながら積極的に意見を出し合う子どもたちの姿とそれを優しく見守りながら助言される先生の姿が印象的だった。協議会では、ホワイトボードの使い方やグループワークについて、その在り方や方法など様々な意見が交わされた。教材の読み取りとは違う学

習内容において、子どもたちに何を教えていくのか、テーマを共通にすることや能力目標を明確にするなどのアイデアも出され、参観者も学び合うことができた。

午後は白百合女子大学教授の河野順子先生をお迎えし、「主体的・対話的で深い学びをどう創造するか」という演題でご講演いただいた。来年度から完全実施される新学習指導要領では、「学習論」がコンテンツベースから資質・能力ベースへ変化している。最近では「主体的・対話的で深い学び」をどのように実施していくか、ということがよく話題に上がる。

教室にある三つの対話、「筆者との対話」「他者との対話」「自己内対話」に注目していくことは、子どもたちのコミュニケーション能力の更なる育成の土台となる。

また、対話を行う際には、「トゥールミン・モデル」(主張・根拠・理由づけを明確にした形式)による三点論法を子どもたちに意識させることも効果的である。大事なものは、根拠と理由を分けて考えることである。子どもたちが話したことを、是非先生が立ち止まって意味づけてほしいと話されていた。

社会科部会

社会科の見方・考え方を

働かせた授業づくり

清水 大(成城学園)

四年生は、「江戸東京の始まりと受け継がれる文化」の六時間目である『清水門から見る家康の町づくり』について吉田有希子先生に授業をしていただいた。

石垣と同じ大きさの模型を実際に見せたり、触れさせたりすることで、石垣を積むことの大変さを実感することはできたが、活発な子どもたちの意見を拾い上げきれなかったことが授業者の反省として出された。

グループ協議では、少人数で授業の良かったところ、改善点を付箋に書き、模造紙にまとめる活動をした。その中で出た、石垣の積み方の大変さを実感するためには、どのような問いかけが良かったのか、次時とのつながりや、授業の最後のまとめ方、クラス経営などについて質疑応答を行った。

少人数での活動だったので、自分の意見を言いやすく、また模造紙にまとめたことで話し合いの過程が分かりやすかった。それぞれのグループの模造紙は午後の全体会の会場に貼り出され、学びを共有することができた。

六年生の授業研究では、「古墳をつくった人々」という単元で、柴生田明先生に授業をしていただいた。来年度に施行される新学習指導要領を見越して、四月に政治分野の学習(主に選挙や人権について)を八時間行っていた。そのため、授業中の児童の発言の中に「象徴」や「権力」という言葉が出てきたのではないかとという授業者からの自評が示された。また、当初は「古墳を作らせる王は良い王か」という問いを投げかけることを考えていたが、教員の価値判断が入ってしまう可能性があるのではないかという意見が、事前の検討会で出ていたため取りやめることにしたとのことであった。

参観者からは、資料集のデータの信用性を指摘する声や、大山古墳の埋葬者が本当に仁徳天皇であるのかという点にも触れたほうがよかったという意見もあった。それに対し、

授業者としては、大人でも意見が分かれていることを児童に問うても結論にはたどり着かないので、授業で扱わない方が良いのではないかとという判断をしたとのことであった。

その他、実践に向けて古墳に赴いて映像資料を作ったり、他の児童の意見や表現について話し合ったりするなど、肯定的な意見が多かった。

午後の研修では、初めに早稲田大学教育総合科学術院教授の小林宏己先生からご講演をいただいた。小林先生は「社会科学習における『視野と見通し』を問う」ことをテーマに、主に二つの視点から講演された。一つ目に午前中の二つの授業の共通点から、授業は「正解を求める」のではなく「自分なりの納得解をもつ」ことが大切であるということについてお話があった。また想像する際には、どうしてそう思うのかその根拠を示すこと、根拠をどう共有するのが重要であるということであった。二つ目に単元全体を見据えた視野と見通しを

持つて問題場面を準備することの重要性についてお話があった。教材化する際に、ストーリー性を意識し、問題を見える化すること。授業はともに創る学びのストーリーであるとおっしゃられていた。その後、質疑応答と、講演をもとに教員同士で「単元」の作り方をキーワードとした意見の交流を行い、各グループで様々な視点から授業の作り方について考える有意義な活動ができた。



算数部会

「!」「?」からつながる

みんなの授業づくり

鈴木 純(学習院)

午前は三本の算数科の授業が公開されました。一年「なんばんめ」(神田知世乃先生)、四年「いろいろな四角形」(武宮慶一郎先生)、五年「単位あたりの大きさ」(北原美和子先生)の授業が行われました。

一年生の授業では、ものの位置を左右や上下と数を使って表す学習をしていました。上下左右の両方を使って位置をきめる高度な内容を楽しみながら子どもたちは学んでいました。四年生の授業では、円周上に置かれた四つの点でできる四角形の構造を考えていました。直径と対角線の関係からできる四角形の性質を論理的に考える工夫された授業でした。

五年生の授業では、三匹のニワトリが十日間の間に産んだたまごの重さの表を示して、どのニワトリがよいニワトリかを考える活動が行われ

ました。平均値や最大値・最小値、散らばりなどをもとに、子どもたちは積極的に話し合い活動を進めていきました。この時に子どもたちの論点になったのが「よいニワトリ」です。状況によって「よい」は違うということに気付きました。先生が「もしも〇〇なら…このニワトリ」と発問して、キャッチフレーズを考えることになりました。子どもたちは、料理

に使うなら平均して同じ大きさのたまごを産むAがよいニワトリなどと、数学的根拠に基づくキャッチフレーズを考えていました。

公開授業後の研究協議会は、グループを作って、数学的な見方・考え方の観点などから、話し合いが活発に進みました。中低学年では、ピナーズ講習会を行って新任の先生や初心者の先生に授業のポイントを解説しました。いずれの分科会も、多数の意見が出される活発な会となりました。

午後は、算数研究部からのお知らせ(主任挨拶・運営委員紹介・部会のお誘い・WA会のお知らせ)、午前の授業の紹介と成城学園初等学校前副校長であられた杉田博之先生による講演会が行われました。「私学の算数教育に期待すること」をテーマに、私学のみさと課題、主体的・対話的な研究会の持ち方、算数教育の歴史についてお話しいただきました。

【講演会に参加された方の感想】
・見通しを立てることや、もっと調べたいと思わせる教材研究が大切であることを再認識しま

した。

・算数教育史十三期の流れがよく分かりました。時代背景、ニーズ、前回の失敗などの流れがつながりました。

・AIが発展していく中で、子どもたちに身に付けさせたい力、について研究していかなければならないと思いました。

今年度の日私小連東京地区教員研修会で算数研究部に参加された方は一八九名でした。また、懇親会には三二名が参加くださり大盛会となりました。

理科部会

おもしろい理科の授業を創る

長田 朋之(光塩女子学院)

午前は三年生と五年生の公開授業を参観し、協議会を行った。

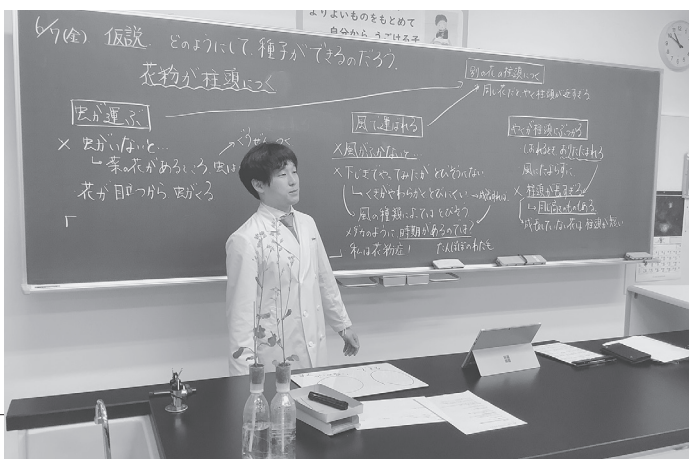
白百合学園小学校の大場明子先生の三年生「明かりをつけよう」の授業について。

「なぜこのはさみは電気を通さない



か」という課題に対して、電気を通すはさみとの違いや電気を通さない理由を考えたり、友達と考えを伝え合ったりできることを目標として授業が行われた。

児童は、刃にコーティングがされたはさみを使って、どうして電気が流れないのかを調べるために実験と観察を行った。児童はお互いに意見を発表し合い、理解を深めている様子だった。



白百合学園小学校の壁谷祐亮先生の五年生「実や種子のできた」の授業について。

受粉の仕組みについて、花のつくりやメダカの発生を根拠として仮説を立て、それを証明するための手立てを話し合っていることを目標として授業が行われた。

児童は、ファストプランツと呼ばれるとても成長の早いアブラナの実物を用いて、どのようにして種子ができるのか調べるために、観察したり考察したりした。児童はお互いに指名し合って意見を発表した。

午後はグリーンアドバイザー／草苑保育専門学校講師である高浜真理子先生による、講演「小学校で育てる植物の栽培のコツ」とワークショップを行った。アサガオ、ヘチマ、ジャガイモなど、小学校で栽培されることの多い植物の栽培のコツを講演でお話いただいた。ワークショップでは、「挿し木」の実習として、ポーチュラカという花を使って、挿し木の体験を行った。

公開授業も講演も、またとない機会となり、充実した研修会であった。

図工部会

つくる喜び、ひろがる世界

関 隆弘(東洋英和女学院)

今回の研修会は白百合学園小学校にて行われました。午前の部は、植木凡子先生による「一年生」かみとあそぼう」という題材の公開授業でスタートしました。文字通りに紙と遊ぶという内容の「造形遊び」です。

「造形遊び」とは、子どもが自由に発想を広げ、のびのびとした活動をとおりて感性や創造性を養うことを目的としたものです。「素材」や「場所」との出会いが重要となるものです。授業の始めには、身の回りにある「紙」を想像するために対話の時間がありました。植木先生の問いかけに、子どもたちは次々と「紙」に対する考えや印象を語っていききました。リスブランという絨毯敷きの部屋に場所を移し、いよいよ本格的な活動の始まりです。部屋には、幅メートル程で長さはまちまちの紙が床一面に置かれています。子どもたちは、非日



常的な光景に歓声を上げました。そして、植木先生から今日はこの紙と遊ぶことを聞くと子どもたちはさらに大興奮です。揉んだり、破ったり、ちぎったり、くしゃくしゃにしたりと、それぞれが素材と触れ合っていました。次第にお互いの工夫を共有し、活動がダイナミックになっていきました。紙を山積みにして中に潜り込む、紙の上を転げ回る、洋服

のように紙をまとうなど、様々な工夫が見られました。そんな子どもたちに、植木先生は一人ひとりの様子に応じてアドバイスをされていた。また、要所で全体指導することで、子どもたちが「造形遊び」を楽しむ雰囲気を出されていました。参観している先生方の顔も笑顔です。最後の片付けは、小さな紙ひとつ残さずに、みんなで協力してきれいにすることができました。その後、授業をめぐっての話し合いを行いました。

とにかく授業中の雰囲気が良いといった感想が多くあり、そのほかの感想や意見も全体で共有し、授業者の植木先生への盛大な拍手をもって午前の部を閉じました。

午後の部は、文部科学省・初等中等教育局・教育課程課教科調査官の岡田京子氏をお招きし「新学習指導要領の趣旨を踏まえた図画工作科の授業づくり」と題した講演をしていただきました。来年度から施行される新学習指導要領をいろいろな実践報告などを踏まえ、分かりやすく読み解いてくださいました。また、植木先生の公開授業を受けての紙と触れ合う「造形遊び」的な要素のあるワークショップを急遽企画してくだ

さりと充実した内容となりました。一日を通して実り多き研修会となり、参加された先生方にとって今後の教育実践の糧となりました。

体育部会

体育の広がり豊かな

スポーツライフの実現

大沢 大介(むさしの学園)

今年度は「体育の広がり豊かなスポーツライフの実現」をテーマに研究を行なう事にしました。

今年度は、いよいよラグビーワールドカップが開催されます。これはサッカーワールドカップに匹敵する注目の大会であり、チケットの大半はすでに売り切れているほどの人気ぶりです。前回大会では、ビックスリートウンプレーの大逆転トライは、今でも記憶に残っています。また五郎丸選手の独特の「ルーティーン」は、子どもたちが真似をするほど人気になりました。そして二〇二〇東京オ

リオンピック・パラリンピックは、すでに日本代表を懸けた熾烈な戦いが始まっています。

今年度は、日私小連全日研修を皮切りに「タグラグビー」の実技・講話、半日研修では、「走・跳・登」と「体づくり運動」につながる「パルクール」の研修を行ないます。体育の学びから将来に渡る「スポーツライフ」の実現、また指導する我々が、児童実技において「安心安全」を確保し、どのように授業を展開すべきなのか、どんなものが考えられるのか研修を通して、探求・研究したいと思っています。

六月七日、梅雨空の中、百合学園小学校体育館に百名を超える先生方をお迎えし、第五十六回東京地区教員研修会を盛大に開催することができました。

午前の研究授業は、鈴木絢先生の指導の下、三年生の「走り幅跳び」の授業であった。本時は、個人の記録を得点化しチームの合計で「競う」団体の戦いの単元であった。仲間の応援の中、踏切板を力強く蹴り、大きな跳躍をするたびに大き

な歓声が上がリ、笑顔で仲間を称え合う「協働」に相応しい授業の雰囲気であった。また初めて良い記録が出た児童と鈴木先生が、ハイタッチをして一緒に喜びを分かち合う姿は、先生の人柄が伝わる場面でもあった。

協議会では、多くの先生が「助走距離」「歩数」「手の振り上げ」など活発な意見交換ができた。今回の授業



研究は我々参加者も日々の授業に生かせる学びの多い時間となった。

午後の研修は、杉並区立馬橋小学校教諭でラグビートップリーグのレフリーを二十年間務められた下井真介先生を講師にお招きして「ラグビー」の実技と講話を行なった。

初めに学習指導要領におけるラグビー位置付けと授業の考察、実技は基本動作の習得、戦術の説明、ミニゲームと多岐に渡る。基本動作では、他のボールゲームにはない、タグを取って返す・付ける動作に悪戦苦闘した。しかしミニゲームになると「これぞ体育の先生」と本領を発揮し、熱の入った攻防が繰り広げられた。後半の講話では、教員とレフリー両方の経験談と下井先生が大切にしている「人との繋がり」についてお話し下さった。

タグラグビーの接触が少なく、運動が苦手な子でも安全に取り組めるボールゲームである良い点を改めて実感する研修となった。

最後に今回の全日研修を企画・運営していただいた白百合学園小学校の校長先生をはじめとする教職員・保護者に心から感謝いたします。

メディア教育部会

描くプログラミング Springin

岡田 俊介(聖学院)

メディア教育部会では、今年度も、「授業の中のメディアの活用を考える」と題して研究を進めています。特に、二〇二〇年度に迫った新しい学習指導要領のスタートと、プログラミング教育に備え、研修を計画してきました。

プログラミング教育に関しては、新たに科目が設置されるわけではなく、各教科の中や、教育課程の中で各学校の裁量で行うなど、運用方法が各学校に任されている分、どのように実施して良いのか、まだ悩んでいる学校も多いのではないかと思います。

そもそも、プログラミング教育の狙いは、プログラミングの技能の習得ではなく、「コンピュータに意図した処理を行うように指示することができる」ということを各教科等で体験させながら情報活用能力に含まれ

る、知識、思考力、判断力、表現力、学びに向かう力や人間性を育成し、各教科等での学びをより確実なものとする(文部科学省「小学校プログラミング教育の手引」より引用)とあります。そのため、同手引では、ブロックプログラミングが例示されています。しかし、こうしたブロックプログラミングは、文字が読めることが前提とされ、角度や速さ、長さといった概念が習得されていることが前提となっています。これでは、低学年からのプログラミング学習の実現は困難と言わざるを得ません。

そこで今回研修にお招きしたのが、株式会社しくみデザインのCEOであり、芸術工学博士という珍しい学位をお持ちの、中村俊介氏です。同氏は、これまでの経験の中で、物事を成し遂げる壁は高くても、物事に取り組む敷居(ハードル)は低くあるべきという考えに立ち、音楽演奏ソフトのKAGURAや、今回ご紹介いただいたプログラミングソフト、Springinを開発されました。Springinというアプリは、画面に描

いたものに役割を持たせ、動かすことによって自分が意図したことを実現していく方法で行うプログラミングアプリであり、これまでのブロックでのプログラミングとは全く違う発想で作りに上げていくプログラミングアプリで、まさに「描くプログラミング」でした。操作方法も簡単で、小学生でも十分に扱えるものであり、中村氏の考えを実現した、プログラミングの敷居を下げるアプリでした。



同アプリは、教育のために制作されたものではなく、中村氏の作ることの楽しさを知ってほしいという願いから生まれたものだそうです。しかし、何かを作ることが楽しいと思う心をくすぐる同アプリは、直感で操作することができ、文字や様々な概念を未習得の小学生でもその楽しみを十分に味わうことができるのではないかと感じました。実際、参加した先生方の反応も、「オー！」や「ワー！」など、声を上げながら楽しむ姿が随所に見られました。

プログラミング教育の実施を来年度に控えた今、プログラミングをどのようにして良いのかまだ悩んでおられる先生方に、この「Springin」をぜひお勧めします。

学校図書館部会

読書感想文指導の

各校の取り組みを通して

小室 麻友(国立学園)

午前の部では、劇団ユニット「おは

なしDecoBeat」による、きむらゆういち作「あらしのよるに」の朗読を鑑賞しました。白百合学園小学校の三年生の授業で毎年行っているプログラムで、楽器の演出も織り交ぜた臨場感あふれる朗読は、教科書にも掲載された誰もが知っている物語であるにも関わらず、心を動かされる内容でした。

午後の部第二部では、白百合学園小学校の図書室の紹介と読書感想文の取り組みをお話頂いた後、各校の読書感想文指導の取り組みについてお話頂きました。

白百合学園小学校では、一年生から読書感想文の指導をされており、青少年読書感想文全国コンクールでも、毎年都の審査会で入賞者を出しています。

感想文指導は担任の先生がなさっており、選書、構想メモ、清書までを毎月行っています。構想メモを大切に、沢山の問いかけを入れることで、苦手な子にも取り組みやすくし、また字形についても細かく指導されているとのこと、日頃の丁寧な指導の積み重ねが、確実に子どもたちの力になっていると感じるお話でした。続いて各校の取り組みとして、成



蹊小学校の読書感想文につながる取り組みは、その年のコンクールの学校代表になった十二作品を収めた読書感想文文集を作って、年度末に子どもたち全員に配布し、友達の良い作品を読んで自分の感想文に生かしていく指導をされているとのこと、日頃の指導として、読書科では「読書の歩み」に記録をしたものに教師がコメントをすることと、担任による日記指導です。自分が一番伝えたいことを日々綴ることと、練習になっているのではないかとのお話でした。

由参加としています。男子が多いので、字形の指導も丁寧に行うことと、小さな参加賞を用意することで意欲につなげているとのことでした。

青山学院初等部では、良い作品にまずは触れてほしいとの思いから、感想文集「本のたからばこ」の販売を行っていることと、コンクール審査上の注意点についてお話頂きました。

毎年、都の審査会で内容ではなく

学校劇部会

字数や、原稿用紙の使い方の点で落とされる作品があることから、学校代表とする時点で再度確認をして頂くようお願いしました。

いずれの学校も、日頃の丁寧な指導を大切にされており、感想文を書くにあたりだけではなく、積み重ねの結果につながっていることがわかるお話ばかりで、質問も多く出る、有意義な研修となりました。

劇づくりは集団づくり

～一人ひとりを伸ばし、
クラス集団を育む劇活動～

百合岡 依子(トキワ松学園)

午前は、入野美沙先生(明星学園)による研究授業「絵本の世界を表現しよう」(白百合学園小学校二年梅組)と授業後の検討会を行いました。授業の流れは以下の通りです。①約束事の確認:切り替えることと、無理なく活動に参加すること。②導入のゲーム:「お顔の体操」「こっちで

パン」「手の上の巨人」③絵本を使った活動:「きょうはみんなでクマがりだ」(マイケル・ローゼン再話)の読み聞かせから始まり、徐々に身体表現活動(大きな川や真つ暗な洞穴、吹雪の中などを、どうやって進んでいくか?等)へ。子どもたちの自由な動きの中から、ユニークな表現をピックアップして全体でシェア。例えば草原を渡るシーンでは、「はさみで切りながら進む」「竹馬に乗って進む」「土を掘ってモグラみたいに進む」等々。④表現遊び「なりきりかくれんぼ」:次々と繰り広げられる子どもたちの豊かな発想に、会場の先生方から拍手や感嘆の声が上がる。

⑤まとめ:全員で輪になってクルダウン。「先生と別れたくない」という子どもたちへ、先生は「これからもう仲良くできるクラスだと思います」と温かなメッセージを送り授業終了。

授業後の検討会では、午後の講師の渡辺先生からアドバイスのもと、「授業のよかった場面と、そこで教師が果たしていた役割をグループで再現する」という形で振り返りを行いました。

午後は、東京学芸大学教職大学院

准教授の渡辺貴裕先生をお迎えし、「学びと集団作りに生かす演劇的手法」をテーマに実技を交えながらご講演いただきました。(以下講演概要)

演劇的手法とは、身体を動かして架空の世界を生み出し、その中で表現することです。それを生かして学習や授業へのアプローチを増やし、身体感覚や空間、想像力を働かせて子どもの学びを充実させるのが目的です。演劇的手法は、例えば夏休みの思い出の振り返りやことわざの学習、物語の理解や英語を用いた交流に取り入れることができます。ここで大切なのは、場や子どもたちの状況に応じたアプローチを行うことです。(実技)人間ものさし「私は木です」「世界を創り出す」全てに共通するのは他者と関わり、共有していく姿勢です。それが新たな創造へのきっかけとなります。また、従来の「理解あつての表現」という一方通行なものではなく、表現と理解の相互循環が生まれる形が子どもたちの創造性を刺激します。

人間が本来持っている「架空の世界を自分の感覚を働かせて経験する」という力を最大限に発揮させると、学びはより実践的で創造的なものとなります。

子どもに求めていることを大人(教師)も行うことで新たな気づきが生まれます。傍観的な視点から子どもの学びを見るのではなく、子どもの作り方も子どもの学びもより創造



外国語部会

小学校における 外国語教育のあり方を考える

竹川 舞(国立音楽大学附属)

外国語部会では、四年生の福田瑛子先生とアイリーナ・ヤニツチ先生による英語と、六年生の八鍬みさ子先生とロレーヌ・エドワーズ先生によるフランス語の授業を公開いただいた。普段英語の授業公開や議論が多い中、特にフランス語の授業を見せていただいたことは非常に貴重な機会だった。

英語の授業は「私の町を紹介しよう」という単元。お祈りから始まり、「赤頭巾」のお話をリズムよく暗唱し、連想クイズもしながらウォームアップが進んだ。英語の授業は三年

的になっていくでしょう。

子どもたちと日々創る授業に新たなアプローチを加え、創造的で実践的なものにする道筋を示していたいた、有意義な時間となりました。

生からで週一回とのことだが、英語を学んで一年少しとは思えない、子ども達のスムーズさや発音に参観者一同、感心していた。

学習の中心は、「学校のまわりの施設や建物について、英語で紹介しよう」。グループで与えられた施設などをどう説明できるか、話し合いを行った。発表の場では、子ども達が帽子を被り、東京駅のグループは「It's red.」「We can buy Tokyo Banana.」など、ツアーガイドになりきって紹介していた。

フランス語の授業では、お祈りあり歌ありワークシートありクイズあり、美しいフランス語の響きを子ども達がしっかりとものになっている様子に、改めて外国語教育について深く考えさせられた。

授業後、白百合学園の外国語カリキュラムについてお話いただいた。フランス語は一年生から週一時間、英語は三年生から週一時間の授業がある。先生方からは、英語教科化に合わせて、評価の方法が今後の課題であり検討中であるとのことだった。

午後は、一般社団法人FutureEduから竹村詠美氏をお招きし、講演いただいた。「Most Likely to Succeed」

という映画を上映し、参加者で学校のありかたについて議論を行った。この映画はアメリカのある高校の実話のドキュメンタリー映画。この学校では、通常の学校のような決められた時間割に沿って授業を受身で受けるのではなく、生徒自身が自分の学習テーマに合わせてExhibitionで発表を行うことを目標に、作品作りにグループで取り組んでいく。いわばプロジェクト型の学習である。グループワークを通じて、卒業後社会で必要とされる社会性やコミュニケーション能力、プレゼン能力などを身につけていく。映画では、「自分分はリーダーに向いていない」と思っていたけれど、この経験を通して、新しい自分の能力を見つけることができた」と言う生徒の成長を見ることができ、一方、「いわゆる数学や科学という科目の授業がないと、子ども達はどのよう

に大学入試の準備をすればいいのか」という保護者の不安も表れていた。

上映後、各グループで話し合われた内容のシェアが行わ

れたが、好意的に見る意見もあれば、教科学習への学校の責任など、疑問視する意見など、様々な意見があった。

竹村氏は、「この映画のような学校を目指してほしいと言いたいのではない。教育には様々な方法や形があり、広い視野で教育について考えるきっかけになってくれれば」と述べられていた。



小学校という現場においても、大事にすべきことは、大事にしつつも、型にとらわれすぎず、子ども本来の持つ力をどう伸ばすことができるだろう、と思考していきたいと感想を持った。

音楽部会

子どもが輝ける音楽を

目指して

室伏 唯史(学習院)

今年度の音楽部会のテーマは、昨年度に引き続き「子どもが輝ける音楽を目指して」である。一人でも多くの子どもが音楽を通して、さらに輝くことができるように、継続して研究を進めることとした。

午前の部会は、羽生田美穂教諭による一年菊組の公開授業を拝見した。四月に入學したばかりの一年生は、今日の授業を待ち望んでいたかのように目を輝かせながら音楽室に揃った。先生の弾くウクレレの優しい音色に合わせて、始業の挨拶のあと、

既習曲を歌った。

当日の天候や児童の様子に応じた選曲がなされた。どの児童も参観する先生方を歓待するかのよう、喜びに満ちた表情で活動していた。生き生きとした歌声が音楽室に満ちあふれた。その歌声は、フレーズのまとまりをよく感じながら丁寧に歌い上げており、日頃から音楽的な歌唱指導が実践されている様子が、よくうかがえた。

本時の中心は、先生が鳴らす四拍子の拍に合わせて、児童一人ひとりが氏名をリレーで発表する活動である。この活動は、四拍子の間合いや拍節感を持たないと、リレーが途切れてしまう。しかし、最後の児童まで途切れることなく、見事にリレーをつなぐことができた。参観者からも驚きと喜びの声が上がった。自分の名前のほかに、友達や物の名前など、変化を持たせながら、あつという間に授業の終わりとなった。

授業後は、すぐに協議会を行った。六名程度のグループを組み、各々が感じたことや疑問点などを付箋紙に書き込み、拡大印刷された指導案に貼り付けて発表する、グループ協議とした。賛成共感、同意などは青で、

疑問、改善、提案などは赤の付箋紙を用いて貼り付けた。この方法は、教師として経験の長短に関わりなく、文字化された様々な意見や感想を共有できる利点がある。一方で、学校の実情や授業者の指導感との食い違いが生じることもある。

授業の振り返りは、午後に行うこととした。付箋紙で彩りが賑やかになった拡大指導案に囲まれ、活発な意見交換がなされた。二月の半日研修では、同教諭の公開授業を予定している。年度末を目前にした時期、音楽的な成長とともに、どのように変容するか。一年菊組の生き生きとした歌声との再会を楽しみにしたい。

協議会のあとは、演奏活動をはじめ、メディアなどでも高名な、ヴァイオリニストのNAOTO氏を講師に迎えて「ヴァイオリンに親しむ」と題してワークショップを行った。音楽の専門分野は多岐にわたるため、大概の教員は弦楽器に触れる機会が少ない。今回は、児童の視点に立ち帰ってヴァイオリンを体験すること

をねらいにワークショップを行った。奏法の基本から「きらきら星」の演奏までを飽きることなく楽しく体験できた。また、チャルダシュ、リベルタンゴ、そして自作のHARUKAZIなど、演奏家としての魅力もたっぷりと披露していただいた。

最後に、この研修会のために、快くヴァイオリンを無償で貸与してくださった、黒澤楽器店のスタッフの



皆さんに感謝を申し上げます。

学級経営部会

フィールドワーク

「靖國神社(遊就館)見学」

清田 雅久(立教)

今年度も学級経営部の目標、テーマは、「子ども・保護者・教師のよりよい関係作りを目指して」です。

今回は、教員の見聞を広め、引き出し作りの一つとして、靖國神社内にある「遊就館」の見学を行いました。

白百合学園小学校のすぐ隣にある靖國神社の本殿前を通り、東京の桜の開花の基準となる「標本木」を見ながら、遊就館へと向かいました。

当日は、展示課長(権瀬宜)の樋口知明氏にご案内をしていただきながら、参加者二十八名で見学をすすめました。

はじめに、靖國神社についての説明があった。靖國神社は、明治二年(二八六九)に明治天皇の思召しに

よって建てられた。その歴史は百五十年ほどで、歴史の浅い神社である。しかし、祀られている御霊の数はおよそ二百四十六万と非常に多いのが特徴である。

「遊就館」は、祀られている英霊について説明し、数多くのご遺書や遺品が残されており、それらを通じて事実を観覧者に知ってもらう施設である。もちろん歴史的な展示物も多くあり嘉永六年からペリー来航の頃まで遡り展示してある。館内には、戦闘機その他、数々の戦争に関係するものが展示してあるが、決して戦争博物館ではないことを知ってほしい。

戦争に關わって亡くなった方々のことを思つて作られた博物館であることを伝えていくことを目的とした博物館である。従つて、靖國神社は平和を願う



神社である。「靖」という文字は「安心の安」と同じ意味を持つており、「安らかな国を願っている」ということである。

樋口氏の概要説明後に、館内を見学した。見学した展示室順に

○展示室一…遊就館の由来について

※「遊就館」は、中国の古典、『荀子』

勸学篇に「君子は居るに必ず郷を擇び、遊ぶに必ず土に就く」から「遊」

「就」を擇び名付けられたと書かれていた。

○展示室三…黒船来航から日本に來航する外国船についての展示があった。

○展示室四…西郷隆盛を中心に鹿児島にて勃発した西南戦争や、その中で最も激戦となった熊本城籠城戦についての展示があった。

○展示室五…靖國神社の創祀についての展示があり、靖國神社の本殿の大屋根の实物が展示されていた。

○展示室六…近代化した日本が初めて戦った対外戦争である日清戦争についての展示であった。

○展示室七…日本が戦勝した日露戦争についての展示がされていた。

○展示室八…日露戦争に勝利した日本は、一時的な平和な時間を送ったが、国際情勢は急変し、第一次世界大戦に続き、昭和六年には満洲事変が起きたことなどがまとめられていた。

○展示室十一…第二次世界大戦直前の世界情勢、日本の資源についての展示があった。

そのほかにも各展示室を見学し、最後に質疑応答で終了した。

今回のフィールドワークを通して、国のために尊い命を捧げた方々の思いや品々を実際に目にする事で、改めて日本の歴史について学びを深めようと感ずることができた大変貴重な経験であった。

家庭科部会

日本の伝統文化を学び、 未来へつなげる

明石 ゆかり(武蔵野東)

一・公開授業

「はじめてみよう クッキング」

「急須でお茶を淹れよう」

授業者 小肩 典子先生

(白百合学園)

五年生四十名のクラスによる公開授業が行われた。ペットボトル飲料が普及し、急須でお茶を淹れる経験がなくなってきたため「日本が昔から大切にしてきた茶の文化に触れその良さを知ってほしい。」という思いで授業者は授業を行った。急須が家庭にないという環境の子どもたちもいるそうである。

始めに、家庭でお茶を淹れた経験を発表し合い、そこで「湯温を下げる」「対流」・「急須のふたにある空気穴の位置の調整」・「新茶は薄いから…」「香りを楽しむには…」など、淹れ方のポイントになる視点は数多く子どもから

出していたことは驚きだった。理路整然、言葉を選び、わかりやすく、伝わるように、発表者全員が発表をした姿は、学園全体の、日ごろの指導の賜物だと感動した。

意見を出し合った後、班ごとに「どんなお茶を淹れたいか」自分たちの好みの煎茶について意見をまとめ淹れ方を決め、実習を行った。

実習中も、子どもたちの落ち着いた立ち居振る舞いは変わらず、足りないものを差し出す、助けになるような振る舞いをさりげなくする、自然な形で譲り合う、画像を見る時には、誰に促されるでもなく照明を消しに行くなど、大人顔負けの行動が随所に見られた。

試飲の時間には、お茶とともに和三盆で作られた干菓子を懐紙に移してからいただいていた。授業者からは、「懐紙の輪の部分を手前」という声掛けがあり、茶道の基本部分をおさえる場面もあった。実習中の子どもたちの様子では、急須を持つ持ち手が逆だったり、ふたに添える手がぎこちなかったり、茶葉を入るす



ぎてしまったりと、子どもらしい一面も見られた実習であった。

二・教科別研究部会Ⅰ

授業者は、日本文化の理解として、一つの良い機会になればという教師側の思いが強くなり、結果、時間が足りずに十分な着地点を得られなかったと反省だった。参観者からは、今後の学習の組み立てに有益な意見交換がなされた。

また、「ICT機器の活用が家庭科でも課題になるのではないか」、な

どのこれからの家庭科の課題や、取り組みなどの紹介も行った。

三、教科別研究会Ⅱ

「どら焼き作り」

講師 ぎんざ空也 空いろ

五代目 山口 彦之氏

自ら「空いろ」というあんにこだわったブランドを立ち上げ、洋菓子専門のコルドンブルー日本校で、和菓子の講師をしている山口氏に、その場で小豆の封を切って煮るあんこ作りを教えていただいた。同じ材料であるのに、我々とは、小豆の粒の食感も甘さもどら焼きの生地との柔らかさもまるで違い、プロの和菓子職人の技術を直に感じられたいい時間だった。

学校保健部会

いじめを考える

～自尊感情の視点から～

藤部 佳子(玉川学園)

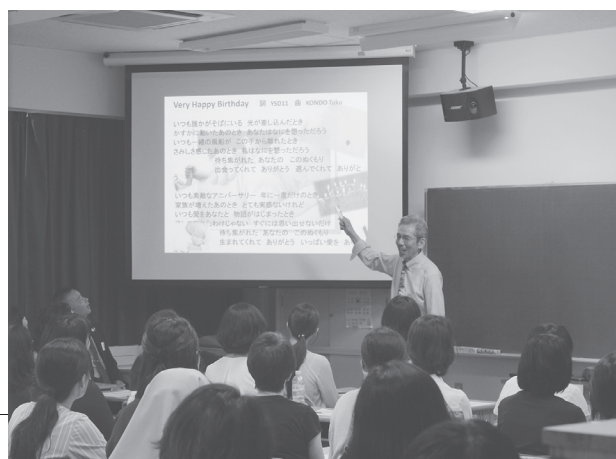
今年度の学校保健部会は「子どもの中から心育てよう」自ら健康

を支える」を活動テーマとしている。個々や集団を対象に子どもたちの健康課題を捉え、解決のためにはどのようなアプローチが必要なのか、子どもたち自身がすることはなか、今年度も部会を通して学びを深めていきたい。

午前の部では、それぞれ自己紹介をしながら、疑問や悩み、学校での出来事等を話す時間をもった。今回は、健康診断の業者委託、給食対応、五月の運動会での熱中症対策、発達障害児への組織対応、働き方改革による影響などの話題が多く上がった。質問に対して、その場で悩みや疑問に答えたりアドバイスをしたりと有意義な情報共有の場になった。秋冬に行われる部会では、今回関心の高かった内容をテーマに上げて疑問を共有し、さらに学びを深めたい。

午後の部は、昨年度に引き継ぎ、日本ウェルネススポーツ大学教授の近藤卓先生をお招きし、「いじめを考える」自尊感情の視点から」というテーマでご講演いただいた。まず、昨年度学んだ「社会的自尊感情」(すこい自分)と「基本的自尊感情」(ありのままの自分)という二つの自尊感情を振り返った。基本的自尊感情は、他者と比較することなく、このままでもいい、生まれてきてよかったと無条件の愛を感じることである。この基本的自尊感情を育てることが大切であり、そのためには、親や教師が、子どもと一緒に笑ったり泣いたりしながら感情と体験を共有し「並ぶ関係」になることが大切となる。

自尊感情から見たいじめの構造は、歪んだ社会的自尊感情が基盤となる。社会的自尊感情が低く自分を大切な存在と思えず、ありのままの自分でいると心を支えられない。そのためには、心のバランスをとるために周囲に認めてもらい社会的自尊感情を膨らませようとするが、頑張り認められなかったり、上手いかなかったりする場合に、他者をいじめること自分より下を見て相対的な優位性を維持しようとする。彼らに対し、親や教師など身近な大人が、時間をかけて共有体験を通して基本的自尊感情を育てることが大切となる。他者をいじめなくとも社会的自尊感情を育てることに繋がっていくのである。



いじめを受ける側に対しては、共有体験が重要となる。いじめのストレスから逃げるといふこともストレスへの対処法の一つであり、不登校や保健室登校で親や教師との共有体験を重ね、ありのままでいられる基本的自尊感情を育てるのである。

最後に、いじめをする側・受ける側のどちらにも心に大きな傷を負うが、それをどう癒していくことができるか、癒された後どう成長するかという視点で、PTG(心的外傷後成長)にも触れられた。

自尊感情の低下がいじめを招く構造を改めて理解し、学校での子どもたちとの共有の時間を重ねていくという日々の関わりの重要性を再認識することができた。今年度も多くの教員が参加し、近藤先生の語り・歌声を共有する貴重な時間となった。

生活・総合部会

子どもが没頭する学習を

大谷 一途(慶應義塾幼稚舎)

全くの日常の雰囲気に近い状態で、下谷明子先生と二年桜組の児童との授業が始まった。児童が動き出す。実験が始まった。紐、ブロック、割りばしなど様々なものを使って、思い思いの実験。おそらく今まで観察して、感じたダンゴムシの習性が、正しいかを、様々に確かめているようだった。その中を下谷先生は、机間巡視し、声をかけていく。

そして発表。内容に分けて、黒板に整理していく。児童の名前のマグネットがあり、発言者とその内容が



一目で分かる。ダンゴムシの進み方、触角の役割、丸まる動きへと発言は広がっていった。しかし、時間切れで、次回となった。

東京の真中だから、ダンゴムシで仕方なしという考えが払しょくされた。ライフサイクルが短いダンゴムシだから、数か月で、皆が「博士」のレベルに至れるのだ。そして、たゆまぬ追究に没頭する子ども達に感動した。

午後は恒例のグループディスカッションである。「飼育・栽培」、「作っ

て遊ぶ」、「最近の子ども」の三グループに分かれ、有意義な情報交換ができた。

最後に、千葉大学教育学部教授兼同附属小学校特命教諭である鈴木隆司先生に「『教育改革』時代の生活・総合学習と私学教育」というテーマで講演とともに作る実習をして頂いた。

今回の学習指導要領の改訂は、私学の危機である。改訂が、何を教えるかではなく、子どもが何を学んだかを問う、結果主義の教育だからである。

ところが、文科省の目指すものは、「主體的に」「絶対的な正しさに」行きつく学習である。ここに独自性の高い私学の生きる道がある。「絶対的な正しさに」に導くのではなく、それを超える新しい世界の創造へと繋がる力を子どもが身につけるのだ。その中核を担うのが、生活科・総合である。

そこで行うことは、新たな内容の創造ではなく、今までの学習内容を視点を変えて、作り変えることである。

その一例として、紙とストロー

で竹トンボを作る実習をした。通常の学習では、ある程度飛ぶ作り方を調べたり、分かったりした上で、竹トンボを作るが、自分で「ひねる」「切る」「貼る」などの工夫をしないと、全く飛ばない竹トンボキットを配って、先生方に工夫して頂いた。飛ばすために、工夫する、工夫しすぎて、飛ばなくなったら、修理、改造する。修理・改造まで行くと、あるべき正解を乗り越えた創造性に行きつく。そこを、子ども達の間だけで工夫させることで、「自分が考えて」社会を創造する力を得られるというお話だった。

先生方も必死になって、工夫・改造を行っていたが、それこそが、子どもが「没頭する」姿そのものであり、深い学びが行われるチャンスだという。そのほかにもいくつかの実践例をご提示頂いた。

子どもに任せながら、子どもが乗り越えるべき課題を提示して、その課題を、子ども達が考え、意見交換して乗り越えていく。戦後初期社会科に見られるような教材観であった。自分達が行っている学習活動をどう工夫していこうかと、帰り道に頭をひねる良いお話だった。

令和元年度

日私小連定期理事会報告

六月十四日(金)東京市ヶ谷のアルカディア市ヶ谷(私学会館)に於いて、令和元年度日私小連定期理事会が開催されました。平成三十年度事業等報告と令和元年度事業等計画について協議が行われ、承認されました。引き続き役員の異動に伴い役員補選が行われました。また、全国教員夏季研修会の部会担当理事の選任、全国幹部研修会の準備状況の報告があり、滞りなく終了しました。

詳細は、各学校にお届けしました令和元年度定期理事会報告書をご覧ください。

学校紹介

「校訓を実践して」

白百合学園小学校

校長 根本 徳子

本学園はフランスのシャルトル聖パウロ修道女会を設立母体としています。今から三百年以上前に、フランスの寒村にある修道院の教会の地下室で子供たちのために教育を始めたのが本学園の原点となっています。

日本における活動は一八七八年（明治十一年）に三人のフランス人の修道女が函館に派遣された時から始まりました。三人の修道女は言葉や生活習慣の違いに戸惑いながらも強い意志のもと、神と隣人への愛ある奉仕に力を尽くしました。本校の前

身は一八八一年（明治十四年）に東京の猿楽町に設立された学校です。

本校は、助けを必要としている人々に優しく思いを寄せ、自分のできることを熱心に、全力で行った創立当初の修道女の心を受け継ぎ、神と人の前に誠実に歩み、愛の心をもって、社会に奉仕する女性を育成することを目的としています。児童は日々の学校生活の中で、校訓の実践に努めています。

「従順」進んで磨こう正しい心
（良心の声に耳を傾け、素直に従い、よりよいものを求める）
「勤勉」進んで何でも一生懸命に

「愛徳」すすんで
みがかう
正しい心
よるこんで

（自分から行動に移し、与えられた力を磨き上げ、役立てる）
「愛徳」進んで親切よろこんで
（周りの人の気持ちを受け入れ、お互いに大切にし合い、他の人のために尽くせる）

本校は、宗教教育を基盤として教育活動が行われています。朝礼や終礼時には神様に静かに心を向ける祈りの時間を大切にしています。また、宗教の時間や宗教行事ではキリストの教えと精神を学びます。命の尊さ・周りの人への愛の心・感謝の心を育て、ほかの人のために自分ができることを考え、実践に努めます。

語学教育では、フランス語は一年生から、英語は三年生から学びます。二か国語を学ぶことは、より豊かな国際感覚を身に着けるとともに、さらに国際理解につながるものと考えています。

学年を超えて縦割りで構成される活動があります。上級生が企画進行を担い、親睦を深め、感謝や奉仕の活動を行う「しらゆりタイム」、登下校時に利用している交通機関ごとにグループを編成し、緊急時に安全に



一緒に下校する方面別班編成、また、校内の清掃も三年生以上の縦割りのメンバーで行っています。

学校では、学級や学年のほかに、いろいろな集団の中で多くの学びがあります。一人ひとりが大切にされ、お互いに支え合い、学び合って成長していきます。児童一人ひとりが安心・安全に過ごすことができ、健やかに、明るく、澁刺と学校生活を送ってほしいと強く願っております。

令和元年度 日本私立小学校連合会役員

地 区 名	役 職 名	氏 名	学 校 名
東 京	会 長	小 泉 清 裕	昭和女子大学大学院
東 京	副 会 長	重 永 睦 夫	東京都市大学付属小学校
関 東	〃	斎 藤 滋	桐光学園小学校
西 日 本	〃	山 本 義 和	須磨浦小学校
北海道・東北	〃	関 博 之	会津若松ザベリオ学園小学校
九 州	〃	中 村 和 子	福岡雙葉小学校
東 京	常 任 理 事	木 村 修 二	武蔵野東小学校
〃	〃	中 村 貞 雄	青山学院初等部
〃	〃	味 形 修	明星大学
〃	〃	横 山 豊 治	清明学園初等学校
〃	〃	南 部 浩 士	田園調布雙葉小学校
〃	〃	山 崎 昭 彦	聖ドミニコ学園小学校
〃	〃	島 野 歩	文教大学付属小学校
〃	〃	小 島 理 恵	目黒星美学園小学校
関 東	理 事	岡 崎 一 実	関東学院小学校
〃	〃	澤 野 誠	湘南白百合学園小学校
西 日 本	〃	山 北 浩 之	城南学園小学校
〃	〃	祢 津 芳 信	甲南小学校
〃	〃	森 田 哲	近畿大学附属小学校
北海道・東北	〃	土 井 智 子	聖ドミニコ学院小学校
九 州	〃	本 田 正 憲	明治学園小学校
東 京	監 事	佐 藤 有 子	自由学園初等部
関 東	〃	澤 本 敦	桐蔭学園小学部

令和元年度 日私小連全国教員夏季研修会 部会担当理事及び委員長

No.	部会名	担当理事	学 校 名	委員長	学 校 名
1	国 語	重 永 睦 夫	東京都市大学付属小学校	安 達 真 理 子	立教小学校
2	社 会	中 村 和 子	福岡雙葉小学校	東 原 秀 郎	国立学園小学校
3	算 数	山 崎 昭 彦	聖ドミニコ学園小学校	時 川 郁 夫	森村学園初等部
4	理 科	澤 野 誠	湘南白百合学園小学校	河 合 幸 仁	国立学園小学校
5	音 楽	中 村 貞 雄	青山学院初等部	設 楽 拓 也	鎌倉女子大学初等部
6	図 工	関 博 之	会津若松ザベリオ学園小学校	大 矢 高 弓	桐光学園小学校
7	体 育	木 村 修 二	武蔵野東小学校	綾 田 満 成	ノートルダム学院小学校
8	学 校 保 健	山 口 博 子	日本女子大学附属豊明小学校	鈴 木 も と み	仁川学院小学校
9	学 級 経 営	南 部 浩 士	田園調布雙葉小学校	笹 野 仁 美	相模女子大学小学部
10	メディア教育	山 本 義 和	須磨浦小学校	田 中 栄 太 郎	日本女子大学附属豊明小学校
11	学 校 図 書 館	岡 崎 一 実	関東学院小学校	石 丸 佳 百 里	聖ヨゼフ学園小学校
12	外 国 語	島 野 歩	文教大学付属小学校	今 井 麻 紀	相模女子大学小学部
13	家 庭 科	小 島 理 恵	目黒星美学園小学校	秦 睦 子	森村学園初等部
14	生 活・総 合	佐 藤 有 子	自由学園初等部	秋 本 篤 志	鎌倉女子大学初等部
15	学 校 劇	横 山 豊 治	清明学園初等学校	川 窪 章 資	森村学園初等部

令和元年度 理事長・校長の異動 他

1. 理事長・校長の異動

(敬称略)

No.	学校名	理 事 長		校 長	
		新 任	前任者	新 任	前任者
東 京 地 区					
3	白百合学園小学校	荻原 禮子	式井久美子	根本 徳子	斉藤 えい
6	愛育学園 (特別支援学校)	富田 哲郎	代行 古川貞二郎	大羽 太郎	西原 彰宏
8	日本女子大学附属豊明小学校	蟻川 芳子	中山 弘子	—	—
12	清明学園初等学校	浅野 輝一	濱野富美子	—	—
17	東京都市大学付属小学校	高橋 遼	安達 功	—	—
21	田園調布雙葉小学校	山下 徹	磯部 力	—	—
27	立教女学院小学校	糸魚川 順	山中 一	—	—
30	立教小学校	白石 典義	神谷 昭男	—	—
38	明星学園小学校	—	—	剛力 正和	福田 純一
41	早稲田大学系属早稲田実業学校初等部	田中 愛治	鎌田 薫	—	—
43	菅生学園初等学校	—	—	下平 孝富	丹治 充
51	国立音楽大学附属小学校	山田 晴彦	長尾 達則	—	—
53	帝京大学小学校	—	—	矢野 英明	星野 昌治
関 東 地 区					
63	桐蔭学園小学部	溝上 慎一	平岩 敬一	—	—
64	慶應義塾横浜初等部	—	—	近藤由紀彦	尾上 義和
65	森村学園初等部	—	—	田川 信之	小栗 透
68	カリタス小学校	齋藤 哲郎	クローデット・ベルニエ	—	—
71	湘南学園小学校	内海 直人	代行 岩武 学	—	—
74	鎌倉女子大学初等部	—	—	勝本 茂	高橋 正尚
75	清泉小学校	深澤 光代	塩谷 惇子	—	—
76	聖マリア小学校	—	—	門家 誠	森 莊一
77	平和学園小学校	所澤 保孝	山口洋一郎	佐藤 陽明	橘 明子
78	横須賀学院小学校	—	—	小出 啓介	仲井 宣雄
80	聖セシリア小学校	—	—	服部 啓明	渡辺 勝之
87	静岡サレジオ小学校	末吉 弘治	福塚 敏彦	—	—
88	東海大学付属静岡翔洋小学校	—	—	江崎 雅治	小寺 建仁
92	青山学院大学系属浦和ルーテル学院小学校	栗原清一郎	東海林敏雄	—	—
93	さとえ学園小学校	—	—	小野田正範	下平 孝富
100	千葉日本大学第一小学校	—	—	寺山 光雄	石井 和生
103	暁星国際小学校	平出 和也	田川 茂	—	—
104	暁星国際流山小学校	平出 和也	田川 茂	—	—
西 日 本 地 区					
114	神戸海星女子学院小学校	梶田 行雄	森田 和子	鈴木 良孝	森田 和子
115	雲雀丘学園小学校	—	—	成地 勉	石田 成光
117	関西学院初等部	平松 一夫	宮原 明	—	—
118	仁川学院小学校	園田 善昭	竹内 昭彦	—	—
128	香里ヌヴェール学院小学校	—	—	西山 哲郎	荒川 伸二
129	アサンブション国際小学校	—	—	丹澤 直己	武井明比古
130	関西大学初等部	—	—	長戸 基	田中 達也
138	帝塚山小学校	—	—	野村 至弘	池田 節
140	奈良学園小学校	伊瀬 敏史	西川 彭	—	—
143	智辯学園奈良カレッジ小学部	—	—	山本 博正	藤田 良一
144	ノートルダム学院小学校	—	—	田中 範子	川端 博之
145	京都聖母学院小学校	—	—	ブレット マックスウェル	澤井 広子
147	光華小学校	—	—	谷口 史子	長者 美里
149	同志社小学校	—	—	横井 和彦	内山伊知郎
157	北陸学院小学校	—	—	茶谷 信一	中島 賢介
160	就実小学校	—	—	山部 英之	森 熊男
164	福山暁の星小学校	田中 靖	朝廣 絹子	児玉ゆかり	中島 知子
167	生光学園小学校	—	—	鎌田 伸久	新居恵美子
北 海 道 ・ 東 北 地 区					
172	盛岡白百合学園小学校	荻原 禮子	式井久美子	—	—
174	仙台白百合学園小学校	荻原 禮子	式井久美子	—	—
177	会津若松ザベリオ学園小学校	鈴木 隆	高橋 博	—	—
179	郡山ザベリオ学園小学校	鈴木 隆	高橋 博	—	—
九 州 地 区					
191	沖縄カトリック小学校	押川 壽夫	有馬 馬瀆	—	—
193	沖縄アミックスインターナショナル小学校	—	—	セバスチャン デイキン	安居 長敏

2. 新加盟校

東京地区

東京農業大学稲花小学校 理事長：大澤 貴寿 校長：夏秋 啓子
〒156-0053 東京都世田谷区桜 3-3-1

3. 校名変更

東京地区

愛育養護学校→愛育学園 (特別支援学校)

関東地区

浦和ルーテル学院小学校→青山学院大学系属浦和ルーテル学院小学校
光風台三育小学校→三育学院大学付属光風台三育小学校

2010年代の教育宣言

今や、地球規模で激動する2010年代を迎えました。私たち私立小学校は、著しい社会変化と科学技術の高度化が進展する時代の中で、建学の精神を継承するとともに伝統を重んじ、その使命とする理想の教育をめざし、誇りをもって初等教育の先駆的な実践を世に問うてきました。

21世紀は「知識基盤社会」の時代であるといわれています。その一方で「心」の時代でもあります。私たち私立小学校は、個人の自由と人権および児童一人一人の個性を尊び、その内なる可能性を児童愛をもって引き出す方法を実践・探求し、未来を切り拓いていく基礎的資質と心豊かな人間性を育成します。

併せて、真の世界平和と持続可能な自然環境の維持のために、広い視野をもって考え、共感する力を身につけた児童を育成します。

そのため、私たち私立小学校は、伝統と特色ある教育をさらに充実させ、私学人としての自覚に立ち、お互いに協力結束し磨き合い、わが国初等教育の新たな創造をめざすことをここに宣言します。

2010（平成22）年6月11日

日本私立小学校連合会